



TITLE:

長沙出土楚帛書の十二神の由來

AUTHOR(S):

林, 巳奈夫

CITATION:

林, 巳奈夫. 長沙出土楚帛書の十二神の由來. 東方學報 1971, 42: 1-63

ISSUE DATE:

1971-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/66475>

RIGHT:

長沙出土楚帛書⁽¹⁾の十二神の由來

林 巳 奈 夫

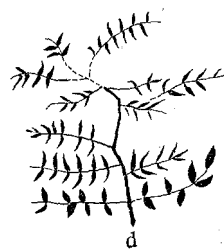
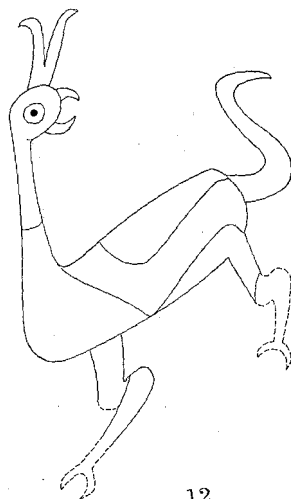
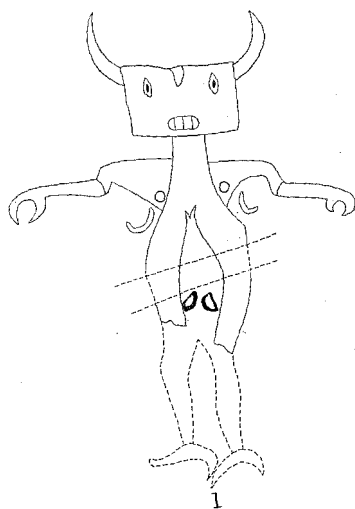
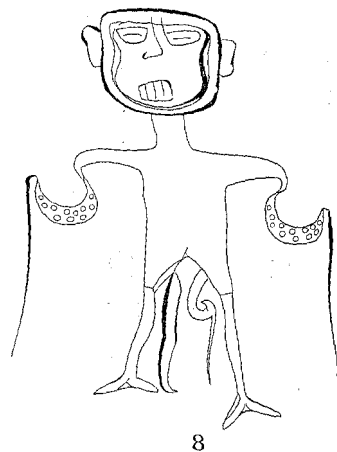
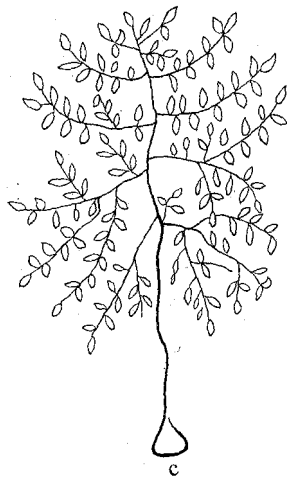
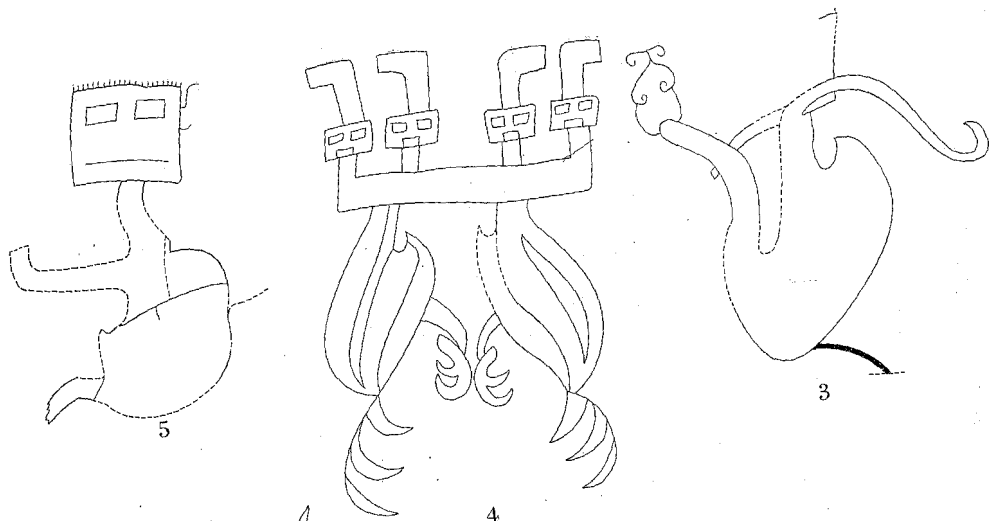
筆者はさきに長沙出土楚帛書の十二神が、當時中國各地で信仰のあつた神巫の類を選り出して一つの系統にまとめ上げたものであらうことを文獻的資料によつて推測し、更に巫ならびに神巫の信仰が殷時代に淵源することを甲骨文によつて論證した。然しながら古典とか卜辭關係の資料は、なんといつても神名の文字とか、巫という名稱とかの、抽象的な形の證據に過ぎないので、筆者が採つた解釋とは別な解釋を容れる餘地も多く残されている。

そこでこの論文では、帛書に畫かれている神像そのものを、他の圖像資料と比較することによつて、同様な神像の同時代における普及の狀況、歴史變遷を確かめ、筆者の解釋の當否を検討し、更に帛書十二神に楚の文化がどのように反影されているかの問題を考へてみたい。⁽²⁾

一 圖像からみた帛書十二神の由來

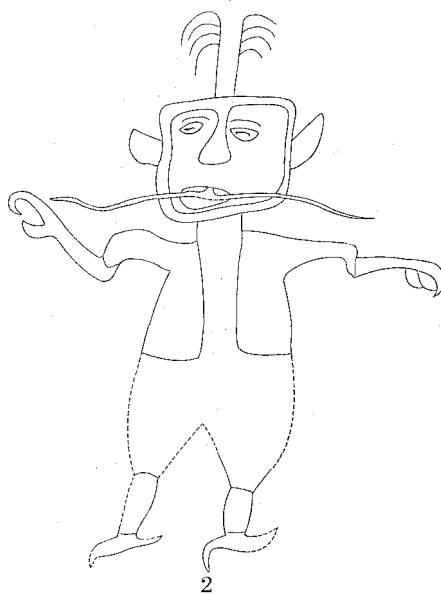
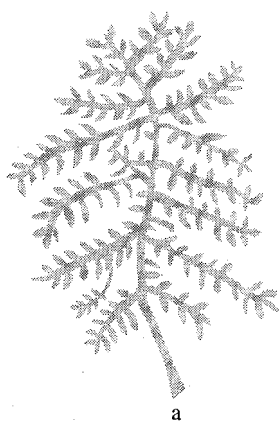
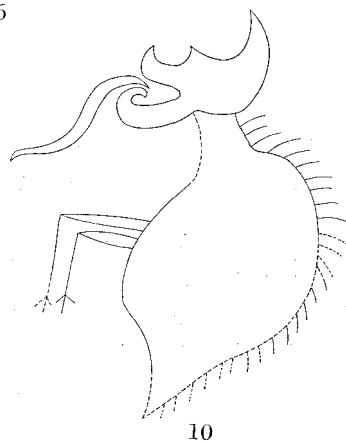
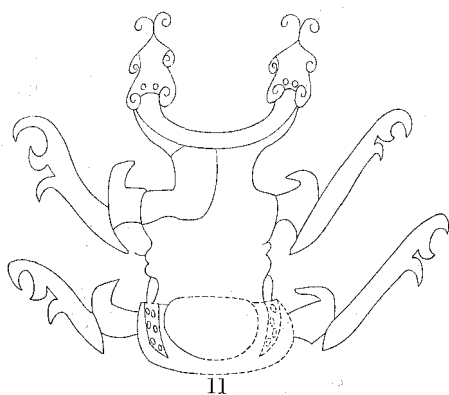
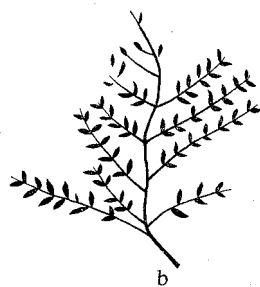
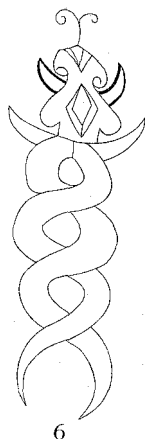
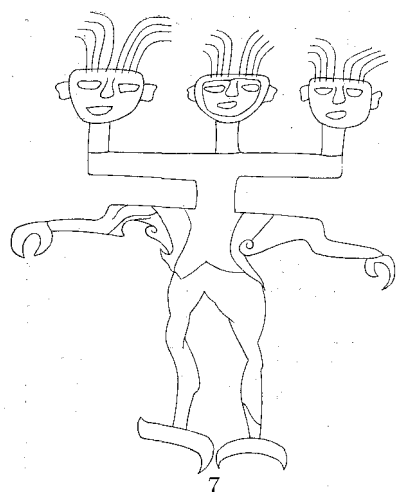
(1)

ここに帛書の十二神像と他の圖像資料の比較を試みるのであるが、比較すべき材料は實は極く限られている。中國ではエジプト、兩河地方などと異なり、石造の彫刻は先秦時代にあまり作られず、木などに刻まれたものも大分が腐朽して失はれ、壁



圖一 長沙出土楚帛書周緣の畫像 約1:1

長沙出土楚帛書の十二神の由來



や絹などに畫かれた畫も残っていない。ここに問題にしている帛書は全く例外的な存在なのである。したがって比較の材料は大部分、工藝品の裝飾のモチーヴとか、象形文字などに限られる。しかし材料の不十分なことは古代研究の常態である。現在手にしうる限りの資料を動員して研究する他はない。

以下十二神の圖像を検討してみる。帛書の圖像の寫しは圖一に示してあるが、これはノール・バーナード氏が赤外線による擴大撮影の鮮明な寫眞をもとに作製したもので、Barnard 1971、圖4B、4Cによるものである。現在手にしうる最も完全な寫しである。挿圖としてここに掲載することを快諾されたバーナード氏に感謝の意を表する次第である。挿圖の番號づけはバーナード氏の番號による。圖一の各圖の配列順序は上右から左へ、帛書の圖の順とその方向に従っている。實際の遺物では圖一の順に、帛書の周圍を一周しているわけである。以前に記したごとく、⁽³⁾3から始まって12・1・2と、それぞれ一月・二月……十二月を司る神である。一年の年の順に、圖一、3から検討してみよう。

(2)

圖一、3——中央左寄りの部分の絹が裂けて失われているため、圖像が本來どのようなものであったか明かにしがたい。右半、下部を占めるハート形の部分は圖一、4・9の胴を象ったと思われる表現に共通しているから、鳥の胴と見ることができよう。その上に來るのは頭のはずである。圖一、9と比べると、頸と角張った頸の一部と思われるものが残っていることが知られる。その左には、頭の一部かと思われる絹の殘片が表裝されている。この頭と思われる部分の右にS字形にくねるものは、舌か、蛇の尾であろうか。後者とすれば、左に認められる蛇に屬するものであろう。ここに蛇というのは、絹の裂け目を隔てて左方にあるもので、上に觸角状のものが出た頭の表現は圖一6・11にもあり、後述のごとく舌を出した蛇の頭と見られる。この頭の下につく胴の左に爪状の表現、その右に腕の一部と見られる二本の線がある。

頗る斷片的ながら、この圖像には蛇と鳥の二つの要素が認められることになる。——バーナード氏の復原圖では両者が一體を

なすごとく黙線で結ばれているが、この復原には疑問がある——鳥と蛇といえ、すぐ思い起されるのは戦國時代に多い、蛇を足で押え、ないしはついでむ鳥のモチヅグである。この圖像も或いはそれであった可能性が考えられるが、こう分斷されては何とも斷定しかねる。

(3)

圖一、4——上部は長方形の頭を四つ、斗棋狀の頸に載せた形である。この表わし方は圖一、7にも認められる。この神像が四頭であることを表わしたものと考えられる。各頭には長方形をもって目と口を表わし、頭上には鉤形に曲つたものが一つづつ着く。これは冠羽のようなもののもりであろうか。

この四頭の下には一對の體が着く。各々の下には三つの枝の出た雄雞の尾羽根のようなものが出ている。體全體の形も足の着き方も鳥の形と考えられる。各胴からは三本の趾をもった足が一本づつ出ている。これは各胴が一本しか足を持たないと考える必要があるまい。圖一、12の神像は獸形の胴から前後各一本しか足が出ていないが、戦國時代に四足獸の足は二本で四本を表わす例のあることは、その條で述べるごとくである。

簡潔にいえば、この神像は方形の頭四つをつけた雙身の鳥ということになる。このようなものは文獻にも見あたらず、相似た圖像も今のところ遺物の中に見出せない。

(4)

圖一、5——長方形の頭と胴の一部、一本の腕と一本の足の一部しか残らない。頭には長方形の雙眼があり、下部に顔の横幅一ぱいに横線が引かれている。後者は口のつもりであろうが、殘缺が甚だしいため、他の資料との比較研究はできない。

なほ、この神像のほか、この帛書には圖一、1と4にも長方形の頭をもつものがある。信陽、長臺關一號墓出土の瑟の漆畫



圖二 信陽長臺關一號
墓出土瑟紋樣 約1:1

にある鳥身の神(圖二)にもこれがみられる。この形の顔は山海經、中山經に

又東一五〇里にあるのを岐山といふ。……神、涉蠹がここに居る。その姿は人身にして「方

面」、三足である

又東百五十里曰岐山……神涉蠹處之、其狀人身而方面三足

とあるごとく、「方面」(四角い顔)と呼ばれたものであろう。墨子に秦の穆公が廟にいと鳥身の神が

入ってきて、顔の形は正方であった。穆公はこれを見て恐れおののき、逃げ出した。という話があるから、四角い顔は恐ろしい神のものと見られていたことが知られる。ただしこの形の顔がどんな象徴的意味をもったものかは明らかでない。

(5)

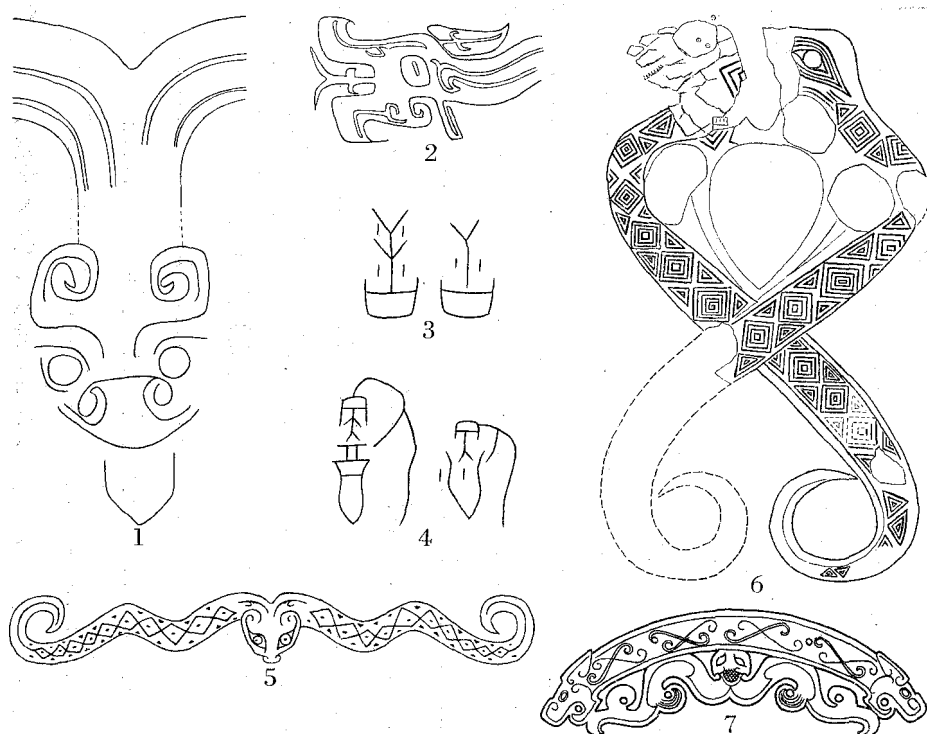
圖一、6—この圖像は、下部、尾の先がちぎれて別の所に裱装されていたが、バーナード氏がこのように正確に復原している。

この圖像の下部が絡み合った蛇の體を表わすことは問頭なからう。上部の、逆ハート形を二つ重ね合せた形の部分は、蛇の頭であらう。蛇の頭を、顎のふくれた毒蛇の頭の形に表現することは、中國で殷から戰國時代、普通に見るところである。

この圖一、6の圖像で、上のハート形のふくらんだ部分に一対白抜きになって見えるのは目であらう。

そうすると、もう一段下に重なったハート形の部分は何であらうか。或いは圖三、1の雙身蛇の頭にみるごとき、渦卷形の角狀の部分が誇張して表わされたものではなからうか。

この蛇の頭の上に細い線で觸角狀のものが畫かれている。これは舌を表わしたものに違いない。勿論この表現は先が二本になった蛇の舌を象つたものと考えられるが、このような表わし方は殷時代からある。即ち、殷時代に龍の舌が圖三、2のごとく表わされ、これは甲骨文舌字(圖三、3)に象られ、この舌の形は人間の舌を表わす場合にも應用されている(圖三、4)ことは、



圖三 1. 輝縣琉璃閣60號墓出土壺紋様 約1/2 2. 青銅甗紋様 約1/2
3・4. 甲骨文字 5. 作冊大方鼎紋様 約1/2 6. 安陽侯家莊1001號
墓出土木器殘痕 約1/2 7. 玉璜

筆者が以前に注意したごとくである。圖一、6の圖像で蛇の舌を實際のものとは異なり、二又の先が擴がった形に表わしているのは、この殷時代の傳統によるものと考えられる。

以上の考察によつてこの圖像が一頭兩身の蛇であることが知られたであろう。私はさきに一頭兩身の蛇が戰國時代に螭、肥遺の名で呼ばれ、涸れ川、涸れ澤に居る神の姿であると信ぜられたことを述べ、この形の動物は殷・西周時代に早く現れることをも指摘した。圖三、5は殷乃至西周初の例で、一頭の兩側に一對の體が波狀にのびた、多く見かける形である。圖三、6は侯家莊一〇〇一號墓の木器の殘痕で、頭の部分が壊れているが、一頭兩身の蛇と記されている⁽⁸⁾。これは二本の胴が絡んだ形に表わされている點、帛書の圖一、6に共通している。

山海經の肥遺は北山經では

……渾夕の山……灑水がこれから流れ出、西北流して海に注ぐ。蛇がいて一首兩身で、肥遺と呼ばれる。これが現れるとその國は日照りになる。

……渾夕之山……跼水出焉、而西北流、注于海、有蛇一首兩身、名曰肥遺、見則其國大旱とあり、一頭兩身の蛇は旱魃の神とされ、帛書で「余」と呼ばれているのと別の神である。

一方、山海經の西山經には同じ名で呼ばれる鳥があり、

……英山には……鳥がいて、その姿は鶉のようで體は黄色く、喙は赤い。その名は肥遺といい、これを食べると癘（疫病）がなおり、また腹の虫を殺すことができる。

……英山……有鳥焉、其狀如鶉、黃身而赤喙、其名曰肥遺、食之已癘、可以殺蟲

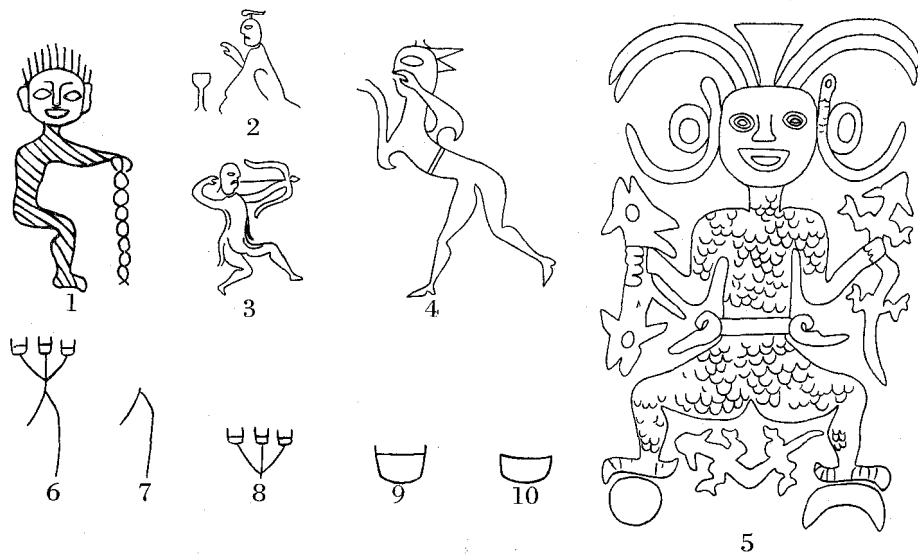
とある。さらに、同じ西山經に肥蠃あり、これは赫赫行が注にいうごとく肥遺と同じである。現れると天下が大旱魃になる點、神としての屬性は北山經の肥遺と同じであるが、姿に相違がある。即ち、

……太華の山には……蛇がいて、肥蠃と呼ばれる。六足四翼で、現れると天下が大旱魃になる。

……太華之山……有蛇焉、名曰肥蠃、六足四翼、見則天下大旱

というのである。⁽⁹⁾これは六本の足と四枚の翼がある點に北山經の肥遺との相違がある。帛書の一頭兩身の蛇の神は、上部に左右對稱に計四枚の羽根乃至翼がある點、西山經の肥遺と共通する。ただし足はない。戰國時代の一頭兩身の蛇では、羽根乃至翼をつけたものは、圖三、7に示すとき例がある。

同じ時期に成立したとされる五藏山經の中に、このように名を同じくして姿を全く異にする神、また同名で同じ屬性をもちながら身體の特徴に若干の相違がある神が出てくるのはおもしろい。同じ肥遺という神が、或る地方では別の姿の神と習合し、或いは離れた地方で別の發展を遂げたものと解釋される。また同じ一頭兩身の蛇が別の所で蠃と呼ばれているのである。一方帛書では、同類の姿をもった神が「余」と呼ばれているのであるが、神々がその起原の時期から何千年かを經て、このような混交を示している時期に、現存の僅かな資料をもって、その正確な系統上の位置づけを行なうことまでは、到底望み得ないことである。



圖四 1. 輝縣琉璃閣1號墓出土銅奩紋様 約1/2 2-4. 信陽長臺關1號墓出土瑟紋様 約1/1 5. 荊門漳河車橋附近出土青銅戈紋様 約1/1
6. 甲骨文字 7-10. 6の文字の説明圖

(6)

圖一、7—この三頭の神を、先人が山海經の三首國・三頭人、淮南子の三頭の民に比定していることは、さきに紹介したとおりである^⑩。ただ、姿の特徴は符合しても名稱は合致しないこと、圖一、6の場合と同様である。

この姿の神の圖像は現在のところ、同時代の資料の中に見出すことはできない。ただ、身體各部の相似た表現は、文獻や圖像の中に類似のものが見出されるので、次に解説しよう。

この神の三つの頭は、頭の上がほぼ眞平らである點に著るしい特色がある。この帛書の神のうち、圖一、2・8・9に同様な表現が見出される。これは「方顛」と呼ばれたものである。

山海經、海内經に

祝融は降って江水に住みつき、共工を生んだ。共工は術器を生んだ。術器の頭は「方顛」であった

祝融降處于江水、生共工、共工生術器、術器首方顛

とあり、郭璞の注に「方顛」とは頭の頂上が平らなことであると言っている。人間にない異常な形と意識されていたことが知られる。この形の頭の表現は、後述のごとく殷時代に由來するものである。

この三つの頭の上にはそれぞれ、始めは垂直に、次いで外向に曲る細い平行線が畫かれている。これは逆立った毛髪と思われる。頭上に逆立った毛髪を着けた鬼神は、同時代のものでは、輝縣琉璃閣出土の奩に毛彫で表わされている(圖四、1)。結っていないざんばらの髪は、古代中國で鬼の特徴的な姿と考えられ、殷周時代の鬼神がそのような姿で表わされていることは、以前に筆者が詳しく論證したごとくである。⁽¹⁾この帛書の例もこの形の髪をもつて怖ろしい鬼神の姿を表現しているものに違いない。

この神の左右に平らに舉げた腕の先には、C字形の手が着いている。これは一見猛禽か猛獸の爪を表わしているかのごとく思われるが、そうではあるまい。普通の人間の手と思われる。信陽長臺關一號墓出土の瑟の畫をみると、宴樂、狩獵をする現世の人間の手が、同様に表わされている(圖四、2、3)からである。これは楚地方の手の描き方のくせと見てよからう。圖一、1・2の神の手についても同様のことがいえる。

圖一、7の神の腕の付け根の下に渦卷が表わされているのは、勿論自然の人間を寫したものではない。前引長臺關の瑟に出てくる鬼神(圖四、4)、及び後に引く圖五、3に相い近い表現が見出される。

圖一、7の神の足は、2の神と同様、あまり人間の足には似ず、足頸から下が長い葉狀に表わされている。これと全く同じ足の表現は、湖北省荊門漳河車橋附近で發見された戈の援に表わされた神像⁽²⁾にも見出される(圖四、5)。前引の圖四、3の人間の足は適確に自然の形を寫生している所をみると、この葉狀の足は鬼神に獨特な、特殊な足を意識的に描いたものと考えられる。これが如何なるものを表わしたものは十分には明らかでない。然し、圖一二、12の鬼神を見ると、手も足も羽根の形で表わされている。圖一、7の神のこの足も、このような羽根から成る足の、戰國時代における表現法ではないかとも考へられる。圖一、4・6・9などの圖像の羽根は葉狀に表わされ、圖一、7のこの足の表わし方と同じだからである。

圖一、7の三頭の神に關聯した記録は、前記のごとく戰國、漢代にあるほか、同時代の圖像には似たものは見出せないが、遡って殷時代の文字にこれに該當すると思われるものがある。圖四、6に示したものである。この文字の下半(圖四、7)は即ち

「人」字で、上に圖四、8の形が着いているのである。ここに三つ着いた圖四、9形は何であろうか。この形は甲骨文・金文の兄、祝字で人間の頭にあたる場所を占めており、これらの文字でこの要素が何を表わすかについては諸説があるが、いずれも決定的とはいえない。

思うに、圖四、9の形は「方顛」の鬼神の頭を象ったものではなからうか。後述のごとく、圖一二、4の金文圖象記號の頭部は、明らかに圖一二、9のごとき方顛の神の頭を象ったもので、上が平らな圖四、10の形に表わされている。圖四、10形であるべきものが圖四、9形のごとく、兩側の劃が上に突き出た形になっているのは、文字化された時に筆の勢い上そうなっただけのことである。當然圖四、10のごとき形であるべき口という象形文字が、甲骨文でも金文でも圖四、9の形に書かれていることをみれば、このことは直ちに明白となろう。

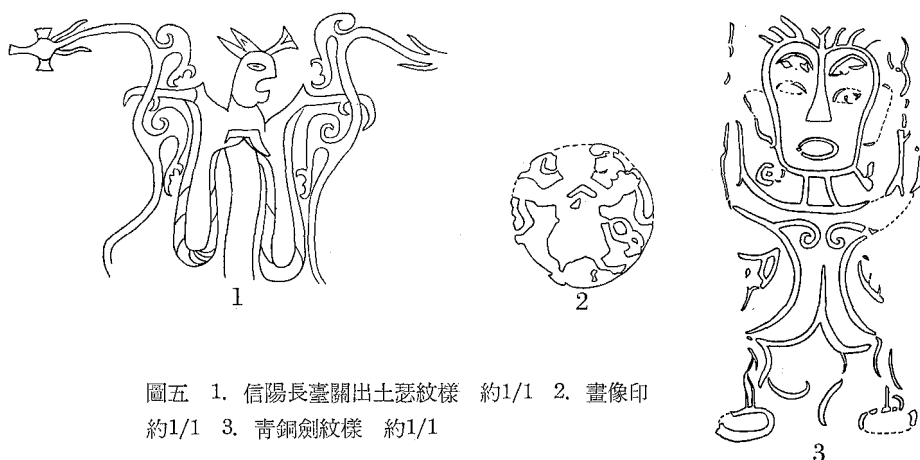
こう見れば圖四、6の文字は、人間の體に方顛の頭が三つ着いた形を表わしたものであることが知られたであろう。勿論こういう人間は現實には存在しないから、この形の鬼神を象ったものであることは疑いない。

この文字は甲骨文では、占いの文字ではない、いわゆる「記事刻辭」に現れ、卜骨を殷王朝に貢納した國の名であることが知られている。⁽¹⁴⁾ その所在地は不明である。圖四、6の記號はおそらくこの國で祭祀を受けていた鬼神を象ったものと考えられる。⁽¹⁵⁾ この殷代の神と帛書の今問題の神とが無關係であるとは考えにくい。

(7)

圖一、8—頭の上が平らな「方顛」の頭をもち、圖一、7の中央の頭と同様、顔のまわりに縁どりがある。四角っぽい口には歯をむき出して見る者を畏怖させる形相をしている。擴げた兩手は肱で一度くびれ、それから先の腕にあたる部分は、上反りの三日月形に表わされている。この部分がどういうものを表わそうとしたか十分明らかでない。

山海經を見ると、海外北經に



圖五 1. 信陽長臺關出土瑟紋樣 約1/1 2. 畫像印 約1/1 3. 青銅劍紋樣 約1/1

柔利國は一目國の東にある。その人の姿は手足が一本づつで、肱と膝の關節は普通と反對向きに折れ曲っており、曲った足は上にある。一説には留利の國とい、その人の足は折れたように普通と反對向に曲っている、という。

柔利國在一目東、爲人一手一足、反袂曲足居上、一云留利之國、人足反折とあり、また大荒西經に

遠隔の地域、大荒の中に山があり、日月の山と呼ばれている。……人間がいて、

その上腕は反對向に曲っており、天虞と呼ばれる

大荒之中有山、名日月山……有人反臂、名曰天虞

とあり、腕や足が普通の人間と反對向に曲るといふ異常な特徴をもったものがあると信ぜられていたことが知られる。或いは圖一、8の神の腕も、尋常とは反對に曲った腕を表わしたものかも知れない。

この手については、しかし別様に考えることも可能である。即ち、圖一、7の神の足について圖一二、12の神と對比し、葉狀の足が羽根を表わしたのではないかと考えた。この手も圖一二、12のごとく、羽狀になった手を表わしたものであるかもしれない。

この両手の先に、細い線で表わされたものが垂れている。これも確かではないが、兩手に一匹づつ蛇を下げているのかも知れない。兩手に蛇を持った神は山海經に少なからず出て来る。圖像でも信陽長臺關一號墓出土の瑟に、兩手に龍を一匹づつ擱んだ神があり(圖五、1)、戰國時代頃の畫像印にも兩手に蛇を一匹づつ持った神がある(圖五、2)。然しこれら文獻・圖像で蛇を持った神も、特に圖一、8の神に似たものはない。

圖一、8の神の脚は殊更ひよろひよろしており、足はまた人間の足らしからぬ形をしている。然しこの足が何を表わすものか確かめ得ない。

また兩足の間に畫かれているものも、何とも判定しがたい。尾かと思れば、二本ある點がおかしい。圖像でこれと同様なものを表わしたのではないかと思われるものとして、圖五、3に示した戰國時代ごろの劍に表わされた四目の神像¹⁷⁾がある。兩足の間に垂れたものの一方が巻き上り、一方がだらりと長く垂れている點、よく似ているようである。これが何であるかは後考に俟ちたい。

以上、8の神像は顯著な特徴を幾つも具えているにかかわらず、比較研究の結果は貧弱である。

(8)

圖一、9—この神は「方顛」の頭をもち、齒をむき出し、怖ろしい形相を表現している。頭上にはうねうねと曲った角のようなものが一對ある。山羊か羚羊の角のようにも見えるが、このような動物の要素は文献にも圖像にも例がないから、鳥の冠羽と見た方がよからう。頭の下には鳥頸ともいべき長い頸があり、心臓形の胴につづく。頸の下に垂れているのは舌のようにも見えるが、口とつながらない。顎鬚と考えられる。胴の下に三つ出る刀形のものは尾羽根であろう。胴の左に大きな足が一本畫かれている。一本を以て二本を代表させたとも見られるが、圖一、10ではちゃんと二本畫かれているから、一足のつもりかも知れない。

この神は一口でいえば、人面鳥身の神である。人面鳥身といわれる神は古典にかなり多く出て来る。楊寛¹⁸⁾はこれについて次のごとくいう。

人面鳥身の神で最も顯著なのは句芒である。山海經、海外東經に

東方には句芒がいて、鳥身人面で龍に乗る

東方句芒、鳥身人面、乘龍

とあり、墨子、明鬼篇、下には

昔、秦の穆公が晝間廟にいと、神が入口を入れて左に曲つて來た。鳥身で、黒の縁をつけた白い衣服を着け、顔の形は正方形であつた。秦の穆公は恐れおののいて逃げ出した。神はいつた「恐れることはない。天の帝は汝の立派な徳をよみし、自分をして汝に壽十九年を下賜させ、汝の國家が蕃昌し、汝の子孫が繁殖して秦國を失うことをなからしめようというのだ」と。穆公は再拜稽首していつた「あなたの名をうかがいたいのですが」。「自分は句芒だ」。

昔者秦穆公當晝日中處乎廟、有神入門而左、鳥身、素服三絶、面狀正方、秦穆公見之、乃恐懼、神曰無懼、帝享女明德、使子錫女壽十年有九、使若國家蕃昌、子孫茂母失秦、穆公再拜稽首曰、敢問神名、曰予爲句芒とある。呂氏春秋、十二紀及び禮記、月令には

孟春の月……その支配する天帝は大皞、その支配する神は句芒である

と句芒を春の神とし、生長を司る者としてゐる。故に壽を下賜し、國家を蕃昌させ、子孫を繁殖させることができるのだ。秦の穆公が廟で會つたのだから、或いは秦の祖先神かも知れない。

という。また楊氏は秦・趙の祖先で禹を輔けて治水に功のあつた伯益も、人面鳥身の神であるとする。即ち墨子、非攻篇、下の

昔、三苗が大いに亂を起し、天は命令を下して之を亡ぼさせることにした……高陽はそこで禹に玄宮で命令を下した。禹は親ら天から授與された玉製の割符を持ち、有苗を征伐した。(以下四字意味不明) 人面鳥身の神が現れ、珪を奉げ持つて禹に侍り、(以下六字意味不明) 有苗の軍隊は大混亂した。後にとうとう有苗は衰微した

昔者三苗大亂、天命殛之……高陽乃命玄宮、禹親把天之瑞命、以征有苗……有神人面鳥身、若瑾以侍(孫詒讓は若瑾は奉珪の誤りだろうという) 搃矢有苗之祥、苗師大亂、後乃遂幾

という傳説、及び隨巢子の同様な傳説に出てくる人面鳥身の神は伯益に外ならぬ、というのである。

楊氏のいうとおり、今日残る記録の中では、嬴姓の祖先神は人面鳥身の神の最も顯著なものである。然し春に配せられて生長を司る句芒、増益の能力のある伯益⁽²⁰⁾は、帛書の「倉、得ることなし」という圖一、9の神と性質が全く合致しない。

句芒・伯益のほかに、山海經をみると各地に人面鳥身の神がいると信ぜられることが知られる。即ち例へば西山經に

……鹿臺の山という。……鳥がいて、その姿は雌雞に似ており人面で、鳧⁽²¹⁾と⁽²²⁾呼ばれる。鳴く時は自分の名を叫ぶ。これが現れると戦争が起る

……鹿臺之山……有鳥焉、其狀如雌雞而人面、名曰鳧、其鳴自叫也、見則有兵

とあり、北山經に、

……灌題の山といふ。……鳥がいて、その姿は雌雞に似ており人面で、人を見ると躍り上る。竦斯と呼ばれる

……灌題之山……有鳥焉、其狀如雌雞而人面、見人則躍、名曰竦斯

とあり、また同經に

……北躑の山という。……鳥がいてその姿は鳥に似て人面、鷖⁽²³⁾と呼ばれる。夜飛びまわり、晝は眠っている。これを食べると體の熱を冷すことができる。

……北躑之山……有鳥焉、其狀如鳥人面、名曰鷖、宵飛而晝伏、食之已渴

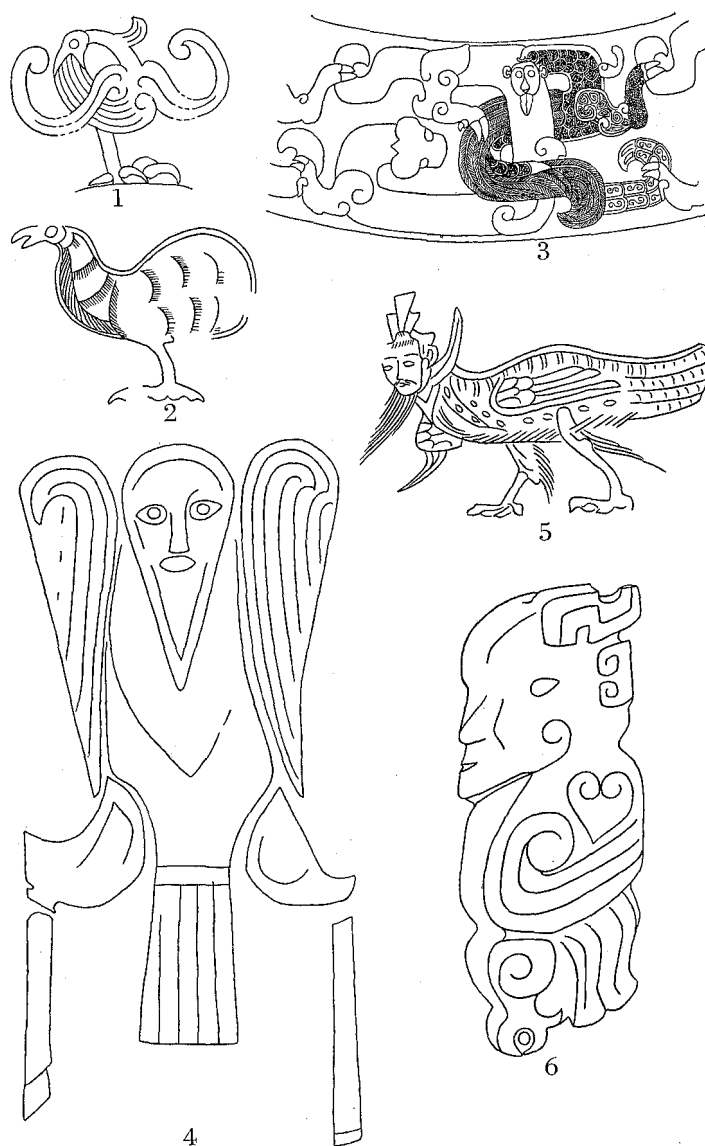
とあり、中山經に

凡そ濟山には……その神は皆人面鳥身である。

凡濟山經之首……人面鳥身

とあるごとくである。

人面鳥身の神はざらにいたらしいが、帛書の「倉」にあたる名のものは記録に残っていないようである。



圖六 1. 青銅鏡紋様 約1/1 2. 沂南畫像石 約1/4 3. 傳渾源李峪村出土壺紋様 約1/4 4. 徐州利國畫像石 約1/4 5. 沂南畫像石 約1/4 6. 玉飾 約1/1

次に圖一、9の神を一足だとすると、人面鳥身一足という神は、古典に僅かししか出て来ない。山海經、西山經に

……綸次之山……有鳥焉、其狀如梟、人面而一足、曰橐蜚という。……鳥がいて、その姿は梟に似、人面で一足であり、橐蜚と呼ばれる。

……綸次之山……有鳥焉、其狀如梟、人面而一足、曰橐蜚とある。また海外南經に

畢方鳥は、……その姿は人面一脚である

畢方鳥……其爲鳥、人面一脚

という。ただし異方鳥は西山經には、

……章莪の山に……鳥がいる。その姿は鶴に似ていて一足で、青地に赤い紋様があり、喙は白く、畢方と呼ばれる

……章莪之山……有鳥、其狀如鶴一足、赤紋青質而白喙、名曰畢方

とあり、赫懿行は注に人面といわない點に注意している。山海經に、同じ名をもちながら居る所が異なるに随って別な姿をした神が現れることは、(5)節で注意した。一足の鳥は圖像では戰國後期の鏡(圖六、1)、後漢の畫像石(圖六、2)に現れる。人面でない畢方とはこのようなものであらう。

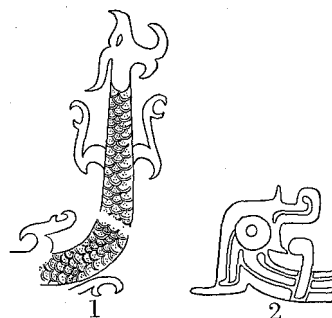
人面の鳥の圖像としては、まず圖六、3が擧げられる。山西省、渾源、李峪村出土と伝えられる壺の紋様の一部で、年代は春秋末である。「人首鳥體の怪獸」と解説されている⁽²⁾。即ち、三角の顎鬚を垂らした頭に鱗狀の紋様のついた顎が着き、その基部から横向に足が出る。足は一本しか表わされていないが、これと絡む龍の足は前後各一本を以て表わされているから、この人面鳥身の鬼神の足も一本を以て二本を代表していることが知られる。足の後には翼、その後には尾羽根が附いている。蛇のようにうねっているのは、龍と絡み合わせるつごうでこのように表わされたと考えられる。

この圖像は頭上に冠羽のない點、帛書の圖一、9の神と相違するが、顎鬚のある點、太い足が横向にある點が類似している。圖六、3の像で足の附け根に大きな渦卷があるのは、圖一、9の圖像の足にある渦卷狀の突出に對應するものである。

長い顎鬚のある人面鳥身の神は、後漢時代の畫像石にも見られる。圖六、4は正面から見た形に表わされる。圖六、5の方は側面形で、頭に冠を着ける。いずれも二足であり、冠羽は表わされていない。

圖六、6はずっと時代が遡る殷時代の例である。サックラー氏所藏の玉製品で、下半は殷時代によく例のある鳳凰や鴟鵂の玉製品と同様な鳥の姿であるが、人間の頭が着いている。後頭部に殷時代の鳳凰の一種⁽²²⁾が着けているのと同様な横S字形の冠羽が着き、帛書の圖一、9の圖像の冠羽の先聲と見ることができると言える。人面鳥身の神が殷時代に由來することを知りうる點、貴重な資料である。

以上、人面鳥身の神は殷時代より例があり、戰國以後の文獻や圖像資料も少なくない。名稱も性格も、また圖像も帛書のもの



圖七 1. 信陽長臺關1號墓出土
瑟紋様 約1/1 2. 陳侯壺紋
様 約1/1

のと完全に符合するものは見出すことができないが、帛書のこの神もその中の一類である點には疑いない。

(9)

圖一、10——この神の頭は、一口に龍頭と呼ぶことができよう。圖七、1は前にもたびたび引いた信陽、長臺關一號墓出土の瑟に畫かれた龍の頭である。上向に反った尖った鼻面、下顎の特徴が共通している。ただ圖一、10では下顎が上顎より前に突出し、耳にあたる部分が大きくて頭との境界がはっきりしない點に相違がある。顔の上面、耳と鼻面との中間に上向の尖った突起があるのは、春秋前・中期の青銅器に表わされた龍(圖七、2)に普通に見かけるものである。普通の例では、この突起の下あたりに目があるのであるが、帛書ではちょうどそこが破損して、本來小さい目があったのが失われたものか、始めから畫かれていなかったものか、明らかでない。

口からは細長い舌が出ている。舌を垂らした龍は圖七、2の如き形で極く普通に見られる。

この神の體はさつまいものように塊狀に表わされ、背に毛が畫かれている。尾のようなものがあつたかどうかは、絹が破れていて明らかでない。この胴の左には小鳥の足のような細い足が二本ある。圖六、2のような體の太い鳥もあるから、この足からみてこの神の體を鳥身と見ることも可能である。

この神が龍首鳥身とすれば、山海經、南山經に

凡そ誰山(の諸山では)、その神の姿は皆鳥身にして龍首である

凡離山之首、自招搖之山、以至箕尾之山……其神狀皆鳥身而龍首

といい、また中山經に

凡そ洞庭山（の諸山では）、その神の姿は皆鳥身にして龍首である

凡洞庭山之首、自篇遇之山至于榮余之山……其神狀皆鳥身而龍首

というごとく、その例は文獻に見出される。然しこの姿が鳥身龍首といえるかどうか、十分確かではない。また類似の圖像も今のところ遺物の中から探し出すことができない。

(10)

圖一、11—この神は、上部に二叉に分れた頸についた二つの頭が見える。この頭は逆ハート形を二つ重ねた形で、一對の目があり、先端が二つに岐れた舌が出、前に記したごとく蛇の頭と認められる。二本の頸は一つの胴につながっているが、その下の胴の形は、絹が破れているため、見極めるのが困難である。バーナード氏は太短い胴の形に復原していられるが、筆者は別の形を推測している。というのは、頸を中心にとみると、四本の足は左右不對稱になっており、全體に左寄りになっている。また左下の足の下から出る、鹿の子紋様のついたものは尾の如くである。そこで、頸から下に着くのは、上の蛇の頭にふさわしく、うねった蛇の胴であったのではないかと考えた。圖四、5の神が向って右側の手に握る龍を、更に強く屈曲させたような形である（圖八、1）。

なお、四本の足の付け根にある鉤狀の突起は、圖五、1の神が兩手に持った龍の足の付け根に見られるものと同じで、一種の羽根である。

筆者の復原が正しいとすれば、この神は一口に兩頭四足の蛇だといえよう。兩頭の蛇については、先に筆者はこれが虺・蜺・虺と呼べたもので、超自然的な力をもった鬼神の一種であろうことを記した。兩頭の蛇といっても、長い體の兩端に首が着く場合と、一端に二つの首が着く場合が考えられる。さきの論文では前者に取ってその形の圖像を挿圖に引用した。

一方、後者の場合も確かにある。爾雅、釋地の

中に枳首蛇がいる

中有枳首蛇

という條の郭璞の注に

「岐頭の蛇だ（岐頭蛇也）」

とある。山海經、海內經に延維という神について

神がいて人間の頭、蛇の體をもち、長さは車の轆のようで、左右に頭がある

とあるのに對して郭璞は「岐頭だ」と注しているから、「岐首」の蛇というのは、確かに後者の意味の兩頭であることが知られる。ただ、これらは圖一、11の神と同様な兩頭ではあつても、足はない。

蛇のような形で四足という、山海經、西山經に

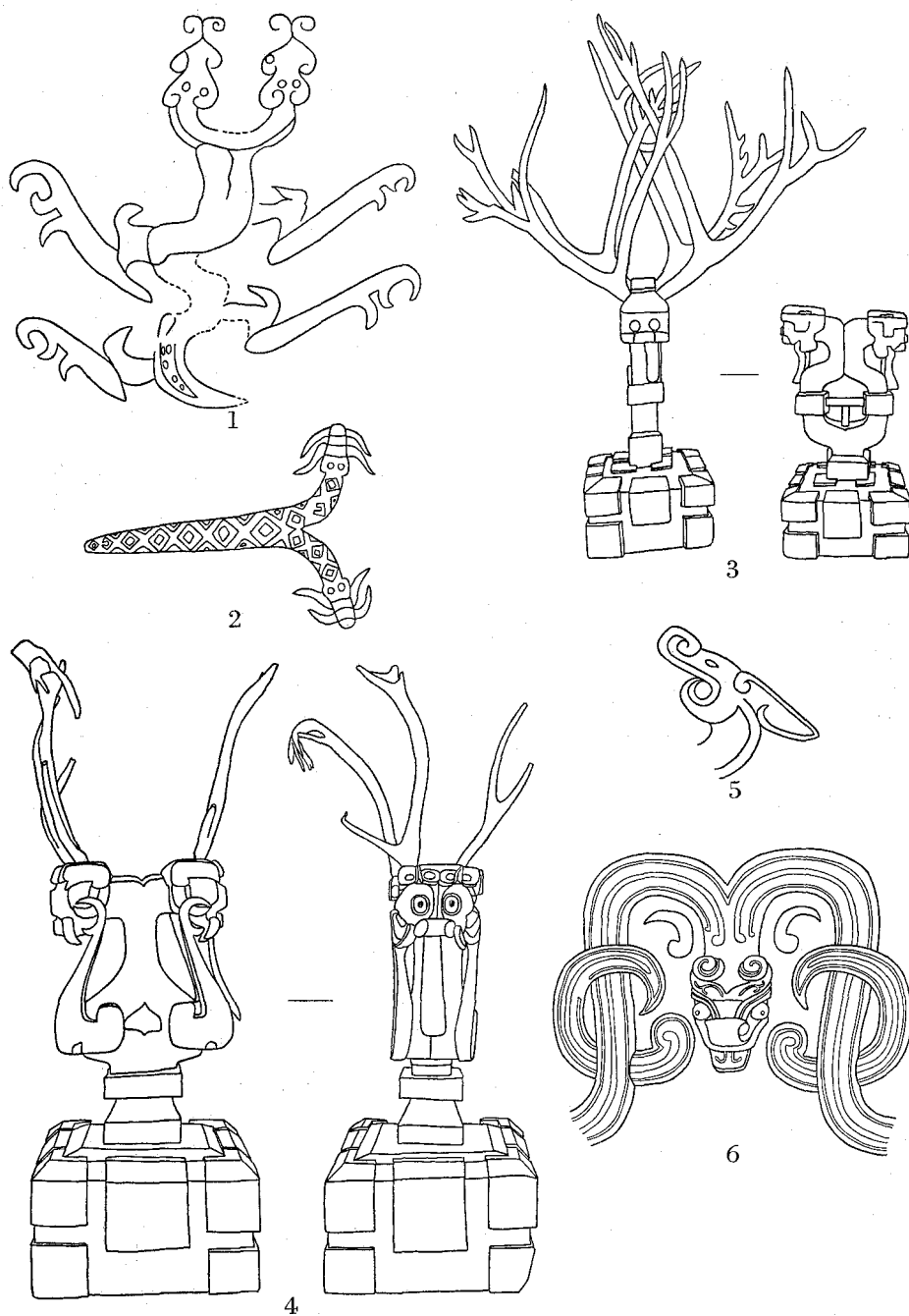
……樂游の山は、桃水が流れ出る。……その中には鰐魚が多い。その姿は蛇のようで四本足である。

……樂游之山、桃水出焉、……其中多鰐魚、其狀如蛇而四足

という例がある。²⁴ただし兩頭ではない。一身岐頭の蛇の圖像は例が少い、圖八、2は陝西省、城固縣五廟村出土の戈に飾られた例である。出土地は秦嶺山脈の南、漢水上流にあたる。この像は頭が細長く、兩側に鯀の鬚のようなものをつけている點、一見蛇らしくない。然し圖八、6の雙身蛇の頭の横にこの鬚と同系統と思われる鬚状のものがあから、やはり蛇の頭と見てよいであろう。胴の菱形の鱗紋様は殷・西周時代の蛇の體によく着けられているものである。まず岐頭の蛇と見てよからう。

然し足のない點、圖一、11の像と相違がある。なおこの戈と同出の鬚は完全な殷式のものであるが、この戈を含む一括出土の武器は、この地方出來のものである。とはいえ大體殷・西周前期のものと見ることができよう。

四足のない岐頭の蛇はまた湖北省、江陵縣、望山一號墓出土の木彫に例が見られる（圖八、3）。長舌を着けた雙頭は背中あわせに配され、強くS字形にうねった頭は下部で合して一つになり、方座の上に樹てられている。頭の作りは寫眞が模糊として



圖八 1. 圖一, 11の鬼神の筆者想像復原圖 約1/1 2. 固城五廊廟村出土戈紋樣 約 $\frac{1}{4}$ 3. 江陵望山1號墓出土鎮墓獸 4. 傳長沙出土鎮墓獸 約 $\frac{1}{6}$
5. 信陽長臺關1號墓土佩玉 6. 頤壺紋樣 約 $\frac{1}{4}$

いるため確かめ得ないが、シルエットから判断して次に引く圖八、4と相近いものと考えられる。岐頭の蛇と呼ぶことができる。頭上に一對の鹿角がある。

右の例は足がないが、湖南省長沙出土と伝えられる圖八、4は、よく似た作りながら各頭に一對の前足が着いている。この遺物についてはサルモニー氏の詳細な記述がある。⁽²⁵⁾氏はこの頭をいわゆる饕餮の一變種と見て、下顎のない所に特徴があると⁽²⁶⁾いっているが、これは誤りである。側面圖で、手の二本の爪の後から來てその間から出ている鉤状のものが下顎である。戰國時代の龍の類の頭で下顎が目はずつと後にあるのは、普通に見るところである(圖八、5)。この側面圖で頭の上に横になった、状のものが見えるのは、一見龍の耳のごとくであるが、そうではあるまい。龍の耳にしては尖った先が前を向いているのがおかしい。圖八、6に示した蛇の頭で目の後にある渦卷状のものに對應するものと考えた方がよからう。こうみると、この頭はいわゆる饕餮の類ではなく、⁽²⁷⁾ 況んや虎など猫科の動物の頭ではない。蛇の頭と見た方がよいであろう。これも頭上に鹿角が植えられている。

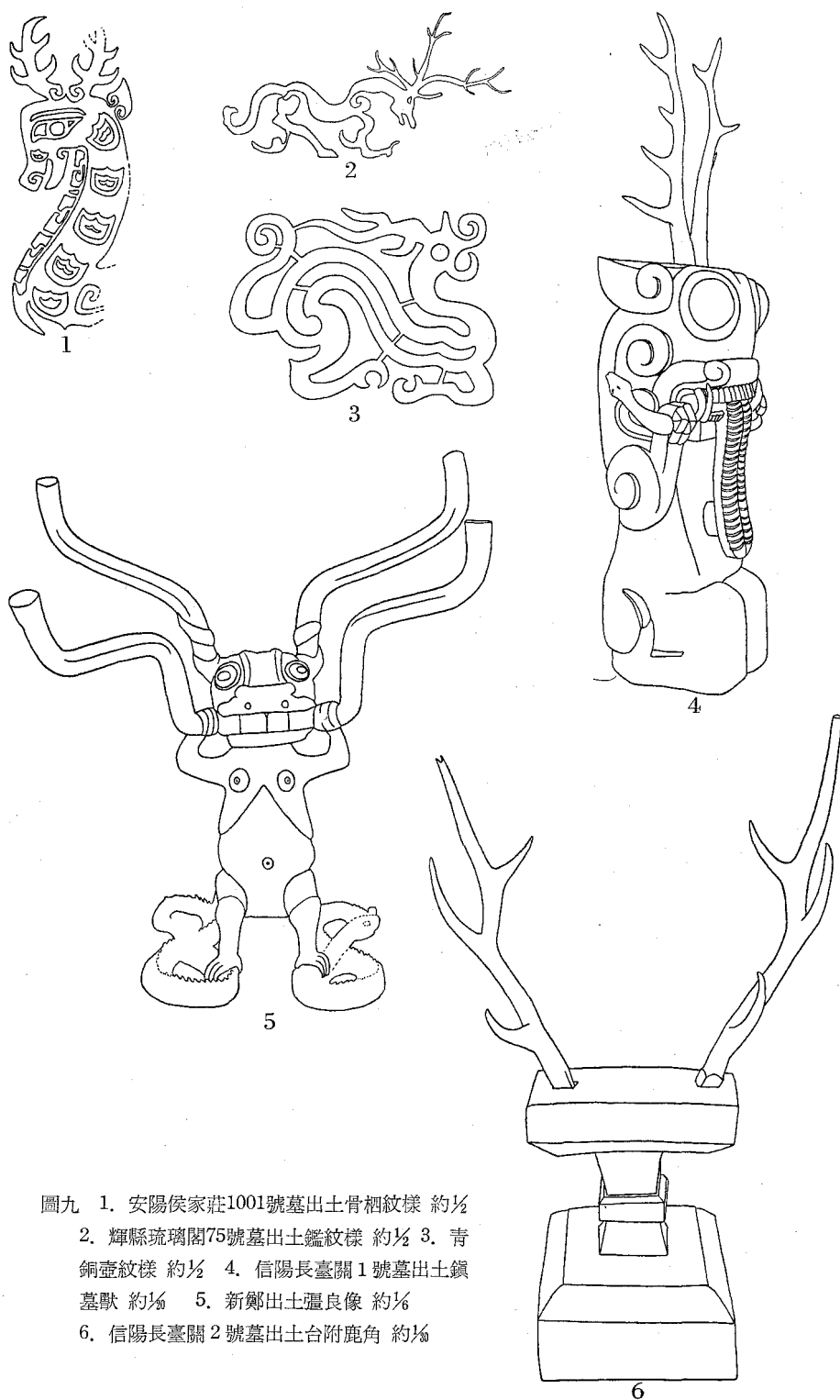
ここに引いた楚國の木彫の鬼神は、いずれも長い舌を出しているが、その形は帛書の圖一、11の神と異なり、動物の舌の如く平たく、蛇の舌らしくない。このような平たい舌を出した蛇は圖八、6に見られる。西周後期、頌壺に飾られた一頭雙身の蛇である。このような舌を出した蛇の表現の由來の古いことが知られる。

ここに引いた木彫と圖一、11の神像との最も大きな相違は、前者が大きな鹿角を着けていることである。饒宗頤氏⁽²⁷⁾は史記、司馬相如傳の集解に

蜚虞は鹿頭龍身の神獸である⁽²⁸⁾

蜚虞、鹿頭龍身神獸

という蜚虞が、この鹿角を着けた鬼神ではなからうか、と言っていられる。しかし蜚虞は岐頭ではない。また「鹿頭」というが、この木彫の頭は鹿に全然似ない。鹿頭龍身の神獸といえ、古いものでは河南省、安陽市、侯家莊一〇〇一號墓出土の彫



圖九 1. 安陽侯家莊1001號墓出土骨柶紋樣 約 $\frac{1}{2}$
 2. 輝縣琉璃閣75號墓出土鑑紋樣 約 $\frac{1}{2}$ 3. 青
 銅壺紋樣 約 $\frac{1}{2}$ 4. 信陽長臺關1號墓出土鎮
 墓獸 約 $\frac{1}{4}$ 5. 新鄭出土疆良像 約 $\frac{1}{4}$
 6. 信陽長臺關2號墓出土台附鹿角 約 $\frac{1}{4}$

骨にある圖九、1のごときものがこれであろう。新しいものでは、河南省、輝縣、琉璃閣七五號墓出土の鑑に飾られた春秋末乃至戰國初の動物(圖九、2)もこの類であろうか。⁽²⁹⁾これよりやや古く、春秋末ごろと思われる圖九、3は、確かに龍身で鹿角があるが、頭も龍で「鹿頭」ではない。

圖八、4の像が蜚蜮でないらしいことが知られたが、するとこれは何であろうか。サルモニー氏は圖八、4のほかに、頭上に鹿角をつけた長沙出土の鬼神の類として、長い舌を出した人間の上半身形のもの、圖八、4のごとく雙頭ではなく、一頭の蛇の形をとったものの例を引き、⁽³⁰⁾これらに共通する鹿角の象徴的意味を考えた。氏はシアトル美術館藏の匱に毛彫で表はされた舞者が頭に着けるのは鹿角で、この角はこの豐穰の舞者に豐穰の力を賦與するものであり、また長沙の墓から出る鹿角を着けた鬼神はいずれも墓の守護者であるから、鹿角はまた防衛する力を鬼神に賦與するものだと考えた。⁽³¹⁾

サルモニー氏のいわれる舞者の着けるものは鹿角ではない。春秋・戰國時代に南冠・楚冠と、後漢時代に獬豸冠・法冠と呼ばれたもので、角状のものは獬豸という神羊の角を象るといわれている。⁽³²⁾

サルモニー氏が、鹿角が墓の守護神に守護の力を與えるものと推定されたのは正しい。圖九、4は信陽長臺關一號墓出土の木彫で、頭上には鹿角が樹てられている。やや破損の度が大きいが、極く近い例は長臺關二號墓からも出ている。⁽³³⁾頭には尖った耳があり、赤い大きな目、齒と長い牙をむき出した大きな口からは長い舌が垂れ、兩手で蛇を擱んで食う狀を示す。⁽³⁴⁾前後肢とも長い爪があるが、後肢を折って人間のように跪坐している。山海經、大荒北經に、

遙か北方の地域、大荒の中に山があり、北極天櫃と呼ばれる。……神がおり、蛇を手に持って口に銜えている。その姿は、頭は虎で體は人間である。四本足で肘は長く、彊良と呼ばれる

大荒之中有山、名曰北極天櫃……又有神、銜蛇操蛇、其狀虎首人身、四踠長肘、名曰彊良
という。鹿角が著く點を除くと、まさにこの長臺關の鬼神の姿そのままである。この彊良は、赫懿行が注に記すごとく續漢書禮儀志中に、大讎にあたって惡鬼を逐うのに活躍する十二獸の一つ、強梁と考えられる。志には

強梁と祖明は共に磔死と寄生という惡鬼を食う

強梁、祖明共食磔死寄生

とある。大饗における強梁の役割も、墓中で果たすことを期待されたと推定される長臺關の鬼神の役割と合致する。安志敏・陳公柔がこの所謂鎮墓獸が大饗の十二獸に變ったのではないかと言ったのは當つていたことになる。⁽³⁵⁾ 鹿角を着けた鬼神が墓を守護するものだろうというサルモニー氏の推測の確實な證據がここに得られたわけである。

安志敏等がいうごとく、この彊良に近い神像は、春秋中期の新鄭の墓から出土した遺物中に見出される(圖九、5)。大きな目と齒をむき出した大きな口、人間らしい體、蛇(う)を手にとって食う點などよく似かよっている。足の下に蛇をふまえている。角、口から出る蛇(?)は器の支えの形になっている。出土したとき破損していたのであるが、この邊の復原が正しいかどうかは不明である。ともあれ、このような怪獸が楚國の專賣でないことを知ることができる。

圖八、3の雙頭蛇、圖九、4の彊良など、文獻に記載されるところは、いずれも鹿角がない。鹿角はいわば鬼の鐵棒のようなもので、それを載いた鬼神にとって本來的な身體の部分ではなく、その超自然的な能力を強化する、附加的なものであつたのではないかと先ず考えられる。この推測を裏づけるものは圖九、6の遺物である。一對の鹿角が漆塗りの臺にはめこまれただけのもので、臺には目鼻もなにもない。河南省、輝縣、趙固村一號戰國墓出土のものは鉛製の臺に嵌めこまれている。報告書には鎮墓獸に著けられたものと推定しているが、⁽³⁶⁾ そのためとすれば鉛製の臺は餘計である。圖九、6のような形で使われたと見た方がよからう。山西省、長治、分水嶺一二號、二四號戰國墓からも彩色した鹿角が出土し、下端が柄狀に削られているため、鎮墓獸に著けられたのだらうと報告者は記しているが、これは臺座に着けられたか神像に着けられたか、全く不明である。最後の例は別にして、前の二例は、鹿角がそれだけ獨立して何らかの神祕的な力をもつものと信ぜられたことを證するものである。それではどういう力であろうか。墓中にあるのであるから、いずれ墓を守護する力であろうことは推測される。次に引く例はその證據を提供するものである。

前引の彊良の出土した信陽長臺關一號墓には腰坑があり、中に「小鹿」の骨が発見されたという⁽³⁷⁾。殷時代の墓に多く腰坑が作られて中に犬が埋められ、これが被葬者を警衛する意味をもったと解釋されていることは、周知のごとくである。春秋戰國時代の墓にも殷時代ほど普遍的ではないが、腰坑を作つて犬を埋める風習は殘存している。例えば河南省、鄭州、碧沙崗で一九五四年に發掘された戰國時代の墓一四五基のうち、一〇基にこれが發見されている⁽³⁸⁾。長臺關一號墓では腰坑に犬の代りに鹿を埋めているから、鹿が犬と相近い役割を果たしたであろうと推定して、ほぼ誤りないであろう。

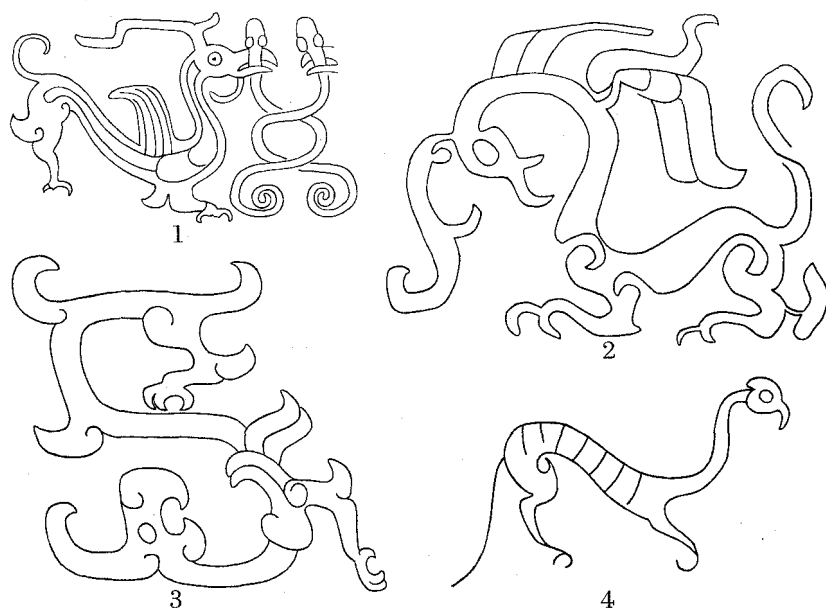
洛陽發見の戰國墓では、腰坑でなく墓壙中にやはり鹿を副葬した例があり、これも右と同様な意味をもったかもしれない⁽³⁹⁾。

鹿が古代中國においてどのような象徴の意味をもったか、考古學的、文獻的資料はかなりあり、ここに關係資料を悉く擧げて論證している餘裕はない。ここには、右に引いた考古學的例證によつて、鹿が犬と同様、墓中に副葬されて、墓に侵入する厲鬼を逐いはらつて主人を警衛する力があると信ぜられたことを知れば、足りるであろう。雄鹿は角が伸びきつた時分はかなり氣が荒く、奈良の春日神社の神鹿が人間に角で突きかかり、觀光客を負傷させる事件は毎年報導されるところである。鹿が厲鬼を突き振うという信仰は、ここに淵源したものと考えられる。またその力の象徴として角だけが臺に建てられて墓中に置かれることもあつたのである。

以上によつて、鹿角が獨立にそれだけで墓の主人を守護する力のあるものと信ぜられたであろうことが證明されたと考える⁽⁴⁰⁾。そうとわかると、さきに引いた鹿角をつけた諸神像は、いわば鹿角を戴くことによつてその威力が強化されたもので、これらは鹿角を着けない姿が本來のものであつたことが推測されるのである。以上の考察によつて圖九、4の彊良が文獻に鹿角があると言はず、圖八、3・4のごとき雙頭蛇の類にも記錄中に鹿角があると記されるものが見出されない所以が理解されたであろう。圖八、3・4の雙頭蛇が本來鹿角のないものであることがわかれば、これらを鹿角のない帛書の圖一、11の雙頭蛇の類例として引くことが正當化されるのである。

なお、以上に引いた發掘例によつて鹿角、ないしそれをつけた神像を墓に副葬する風習は楚に限られず、河南・山西など中

國の古い文明地域にもあったことが知られる。サルモニーの⁽⁴⁾信仰であろうとする考えは修正を要するであろう。



圖一〇 1. 青銅壺紋様 約 1/1 2. 輝縣琉璃閣75號墓出土鑑紋様 約1/1
3. 青銅壺紋様 約1/1 4. 北京懷柔城出土陶壺紋様 約1/2

(II)

圖一、12—この神の姿は一口にいえば鳥首獸身である。頭の上には圖一、9の神にあったのと近い、冠羽と思われるものがある。頭は一見して明らかなくとく鳥で、猛禽乃至鸚鵡の類に似た嘴がある。細長い頸も鳥のものであろう。胴は鹿のものに似、尾は鹿とは似ず、太くて長い。同じ鹿の類でも四不像 *Elaphurus davidianus* は長い尾をもつが、これほど長くない。胴に大きな斑があり、肩から後に斜めに斑が始まる點、獬 *Tapirus indicus* に似ている。足は動物の足の如くであるが、足先の形はかすれてわからない。前後一本づつ畫かれていたが、四足を表わしたものと見てよからう。春秋戰國時代の繪畫的表現で、四足獸をこのように表わす例は多い。例えば前引の信陽長臺關一號墓の瑟の狩獵の圖柄で、獵犬、これに追われる鹿をこのように表わしているごとくである。

圖一、12の神像に近い形のもは戰國時代の銅器・土器に表わされている。圖一〇、1は圖一、12と似るが、翼のある點に

相違がある。冠羽は鳳凰のものと同じ形である。輝縣琉璃閣七五號墓出土の鑑につけられた紋様の圖一〇、2も圖一〇、1と近い。出土地がわかるので引いた。これは翼のほか、頸から羽根が出ている。圖一〇、3は多數並列して紋様を形成するものの一単位をとり出したものである。紋様化するつごうによるものか、胴が細長く、體の曲り目に羽根が出ている點、龍に似た様相を示す。嘴の曲り方や冠羽の形は圖一、12の神とよく似ている。圖一〇、4は北京、懷柔城の北部で發掘された戰國時代の土器の刻紋である。これは12に似て翼はないが、冠羽を缺く。以上帛書の神と全く同じものはないが、相近いものが華北地域にも在ったことが知られよう。なおこれらと共通な特徴をもった鬼神の類は後漢時代の畫像石の中にも多く見出される⁽⁴⁾。

このような鳥頭獸身の鬼神にちょうど當てはまる記述は飛廉について残っている。漢書、武帝紀の注に⁽⁵⁾

晋灼曰く(飛廉は)體は鹿に似、頭は爵のようで角があつて蛇の尾をもち、體の紋様は豹のようである

晋灼曰、身似鹿、頭如爵、有角而蛇尾、文如豹文

とある。またこの注には、飛廉は風や雲を呼び起す神禽だと説明されている。

この注に「爵のようだ」という爵は雀^{すずめ}でなく、鳳凰のことであろう⁽⁴⁾。「角がある」という角も、着くのが鳥頭であるから動物の角でなく冠羽と考えられる。説文に

雀はミミズクである……毛角あり

雀、鷗屬……有毛角

といい、鳥の頭に着く羽根を角ということが知られるからである。「紋様は豹のようだ」という豹は、説文に

豹は虎に似て圓い紋がある

豹、似虎圖文

という豹 *Felis leopardus* だと考えると、帛書の12の神像と合わない。豹には獬 *Tapirus indicus* の意味がある。爾雅、釋獸に

獾は白豹である

獾、白豹

といい、赫懿行は爾雅義疏のこの條に獾が豹といわれたことを證している。

こうみると、晋灼の飛廉についての説明は、帛書の圖一、12の神像と頗るよく合うことになる。ただし飛廉の姿については、全く別な説がある。文選、上林賦の注に⁽⁴⁵⁾

郭璞曰く、飛廉は龍雀である。鳥身で鹿頭をもつ

郭璞曰、飛廉、龍雀也、鳥身鹿頭

という。第(5)節で記したごとく、戰國時代に同名の神が土地を異にするに随つて別の姿のものと信ぜられていた例があるから、これは別に異とするに當るまい。

史記の秦本紀をみると次のやうな話がある。飛廉は秦の傳說的祖先で、父の惡來と共に力があつたので一緒に殷の紂王に仕えたという。周の武王が紂を伐つや、紂と共に惡來も殺してしまった。この時飛廉は紂のために北方に使っていたが、歸つても報告する主君がいらない。そこで壇を霍太山に作つて報告した。壇を作る時に石棺を見つけた。それに銘があり「天帝はお前をして殷の亂に關與させなかつた。お前に石棺を賜い、お前の一族に光榮を與える」とあつた。死するや霍太山に葬られた、というのである。

風と雲の神で、嬴姓の部族の祖先神であつた飛廉は、霍太山、即ち山西省、汾水中流、霍縣の東北の太岳山に祭祀の本據があつたことが知られる。ここに祀られた飛廉が、帛書の圖一、12の神と極めて近い姿をもつた晋灼のいう飛廉であるかどうかわからないが、少なくともその親縁の神が山西省中央部で祀られていたことが知られるのである。

飛廉の傳説は殷時代のこととして語られているが、このような鳥頭獸身の神の圖像は今のところ殷時代の遺物には見出せない。

(12)

圖一、1—この神像の左手と足は圖一、10の脇に誤って裏返しに裱装されていたのを、バーナード氏が正しい位置に復原したのである。

この神の頭牛角を着けは、長方形で、第(4)節で記した「方面」である。目は普通の目と異なり、縦方向に着いている。このような目は「従目」「直目」と呼ばれたものと考えられる。山海經、海内北經に

祿(魅)は、その姿は人身で頭は黒く従目である

祿、其爲物、人身黑首従目

といい、赫懿行は楚辭、大招に「豚の頭で従目、ざんばら髪」(豕首従目被髮鬣只)というのはこれだろうかといっている、また大荒北經に

……に章尾山がある。ここに神がおり、顔は人間で體は蛇で赤く、直目正乗である

とあり、郭璞は注に

直目とは目が従(縦)になっていることである。正乗という言葉は聞いたことがない

直目、目従也、正乗未聞

といっている。今引いた海内北經で魅がこの「従目」をもつというから、この式の目は見るも恐ろしい化物の特徴の一つであったことが知られる。

なお圖一、1の神の顔に楔形が畫かれているが、これは何を表わしたもののかわらかでない。擴げた兩手の形は圖一、7に似ている。短い胴の下に脚が着く。兩脚の内側と腕の附け根に一つづつ鉤形のものがある。同様なものは圖一一、1の鳥首人身の鬼神の兩手、兩足にも認められる。この例は鳥首であるから、この鉤は或いは雞の蹴爪のようなものに由來するのではない

かと考えられる。

この圖一、1の神の足先は失われているが圖一一、1の像の足から類推すると、バーナード氏の復原圖とは異なり、この鉤の下はふくらはぎで圖一一、2に示した如く現在よく残っている左足の少し先が足先になっていたのではないかと考えられる。そうすると、この神の足は外側に強く彎曲したO字脚に表わされていたことになる。これは異常な身體的特徴を意識的に表わしたものとみるべきであろう。山海經、海內經に

韓流擢首謹耳、顔は人間で口先は豚、身に鱗があつて渠股、足先は豚である
韓流擢首謹耳、人面豕喙、鱗身渠股

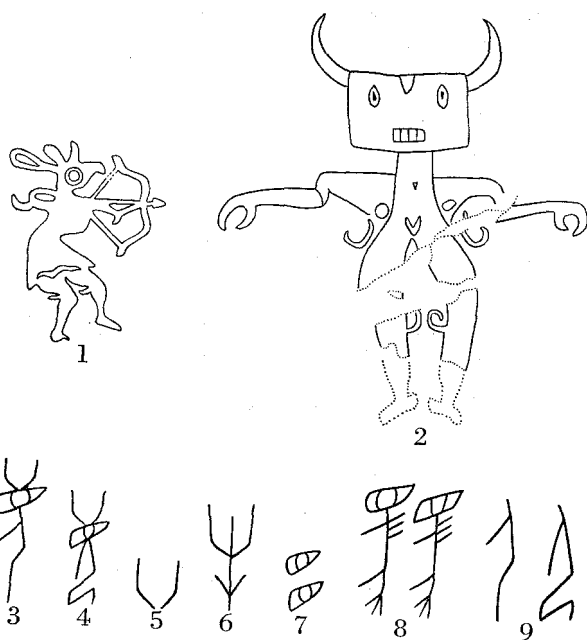
という。ここにいう「渠股」は、郭璞の注に

渠は車の輞(タイヤ)である。跗脚をいう

渠、車輞、言跗脚也

と説明している。車の輞といっても、脚の説明であるから圓形のはずはない。中國古代の車の輞は何本かの弧形の木材をつぎ合せて圓形に作ったものである。渠股は、輞を形成する弧形の材の形をした曲った脚、ということと考えられる⁽⁴⁶⁾。そうすると、ちょうどこの圖一、1の神の足のような形である。この神の足が畸型のO字脚を表わしているとすると、胴が異常に短いのも、せむしのような畸型を表わしているのかも短れない。

こうみると圖一、1の神は牛角を着け、方面従目、「跗



圖一一 1. 青銅壺紋様 約1/1 2. 圖一、1の鬼神
の筆者の想像復原圖 約1/1 3・4・6・8. 甲骨
文字 5・7・9. 3と4の説明圖

脚」ということになる。このような神は文獻の中に發見されない。

帝王世紀に

神農氏は……人間の體で牛の頭をもつ

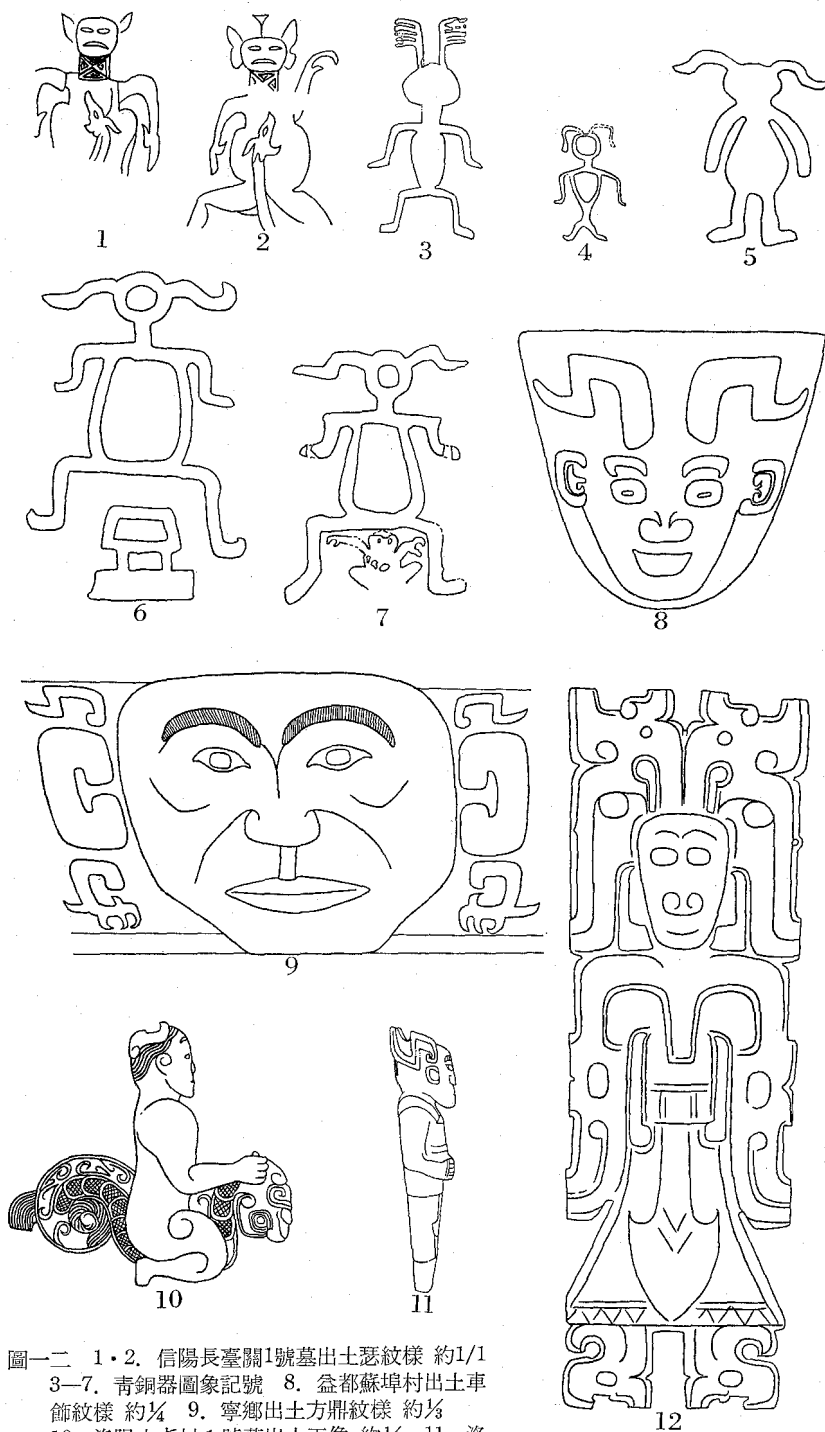
神農氏……人身牛首

というが、前に記したごとく、この神像は人身とはいへ得ても、牛の頭をもっているとはいえない。「人間の體で牛の頭」というのであれば、殷時代の甲骨文字にこれに相當するものがある。圖一一、3及び4である。この文字の上部の圖一一、5形は甲骨文字の牛字(圖一一、6)を見れば明らかなごとく、牛の角を表わすものといえる。またその下の圖一一、7形も、例えば甲骨文字の馬字を(圖一一、8)に作ることから知られるごとく、動物の頭を象ると見ることができ、その下の圖一一、9形が立った人間、跪坐した人間を表わすことはいふまでもない。即ち圖一一、3・4はいずれも「人間の體で牛の頭」という姿を象つたものである。これらの文字はいずれも甲骨文では地名として用いられて⁽⁴⁾いる。これらの文字は後世神農氏とされる神の由來の殷に遡ることを證するが、帛書の圖一、1の神とは直接關係はなさそうである。

(13)

圖一、2—この神の頭は上が平らな「方顛」の特徴をもち、顔の周圍に縁どりがある點圖一、8の神に似ている。ただ口から細長い舌が左右に岐出して波うつ點、及び耳の形に相違がある。圖一、8の耳は人間の耳らしい形であるに對し、この神の耳は牛か何か、動物の耳を象つたようである。頭上には薄の穗のようなものが一對建っている。羽根を表わしたものであろう。手は圖一、7のごとく左右に擴げているが、位置はやや不對稱である。胴は太短く、足も短い。足先は圖一、7と同様葉狀に表わされている。

このような神は文獻に記されているかどうか、このように頭は何の動物、體は何の動物というように判定しがたいものにつ



圖一二 1・2. 信陽長臺關一號墓出土瑟紋樣 約1/1
3—7. 青銅器圖象記號 8. 益都蘇埠村出土車
飾紋樣 約1/4 9. 寧鄉出土方鼎紋樣 約1/2
10. 洛陽小屯村一號墓出土玉像 約1/2 11. 洛
陽東郊西周墓出土玉像 約1/2 12. 玉像 約1/2

いては、探す手だてがない。

そこで圖像についてみるに、圖一二、1の信陽長臺關一號墓出土の瑟に畫かれた鬼神は、頭の形、牛の耳か何かのような大きな耳、ずんぐりした胴が2の神と似ている。ただ頭の直上から上が缺失しているので、そこに羽があったかどうかかわからな

い。胸には龍が一匹はい上っている。圖一二、2の同じ瑟に表わされた鬼神も頭や耳、胴の形が圖一二、1とよく似ている。やや大仰であるが手の位置は圖一、2の神の手の姿勢と共通している。頭上に圖四、5の鬼神の頭の中央に建っていたのと同じ楔形のものがある。羽根の一種と認めてよいであろう。⁽⁴⁸⁾

殷時代に遡って相近い冠羽を附けた人間形の鬼神をさがしてみると、圖象記號に圖一二、3のようなものが見つかる。頭上に建った羽根を比べると、帛書の圖一、2の神と極めて近い。然しこの銘文は拓本で見ると、偽刻の疑いが拭いきれないから、深入りしない方がよいであろう。

殷時代にはこれとは別な表わし方であるが、頭上に一對の冠羽を附けた人間形の鬼神が見出される。圖一二、4の圖象記號は股を開いて立った正面形の人間の頭上に一對の乙字形のものが附く。圖一二、5も同じ記號と考えられるが胴が太い。圖一二、6・7は股の間に別な要素が加わっているが、上に立つ人間形は右と同じものを表わしたものであろう。更に太い體をもっている。圖一二、8は山東省、益都、蘇埠屯發見の西周前期頃の車飾に表わされたものであるが、人間の顔の上に乙字形のものが一對付き、圖一二、4―7の記號の頭の部分を丁寧に表わしたものであることは疑いない。圖一二、9は湖南省寧鄉縣發見の方鼎に飾られたものである。隅圓の四角形の顔の上部左右に小さくはあるが同様な乙字形のものが着き、圖一二、8と同じ鬼神を表わしたことは明らかである。

筆者はさきに鳳凰の類の圖像を研究して、右の人間形の鬼神が頭に着けていると同じ乙字形の冠羽をつけた鳳凰が、翟（49）おそらく金雞（50）を原形としたもので、乙字形のものは冠羽を象つたものであろうことを推測した。今問題の人間形の圖象は、頭にこの鳳凰と同じ冠羽を一對つけた鬼神の類ということになる。これらの圖像が、頭に羽根を挿して飾りとしたただの人間でないことは、例えば圖一二、9を見れば明らかである。即ち鼎の正面には通常所謂饕餮の類が飾られており、これが超自然的な威力をもった鬼神であったことは萬人の認めるところである。今問題の人間形がそれに取って代っているのであるから、これが鬼神の類と考えられていたことはほぼ間違いないであろう。

こうみると、頭上に着く羽根の表わし方に帛書の圖一、2の神とは相違が認められるとはいえ、一對の冠羽を着けた人間形の鬼神が殷時代にあったことが知られるのである。帛書の圖一、2の神が著るしく太い胴をもっており殷時代の例で圖一二、5-7も太い胴をもっていること、また帛書の圖一、2の神も、圖一二、8（圖一二、4もそう見ることができる）も同じく方顛であること、などの類似も偶然だとは考えられない。

このように頭上に一對の冠羽を着けた神は、後の時代にも見出される。西周前期頃と思われる圖一二、11がそれである。これは衣服を着けている。西周末ないし春秋初と思われる圖一二、12も同様な冠羽を着けているが、冠羽は分岐して複雑な形になっている。手足も羽根の形で表わされている。やはり衣服を着けている。圖一二、10は洛陽小屯村の戰國墓出土の例で、やはり頭上に同じようなものが着いている。裸で虎に騎る。

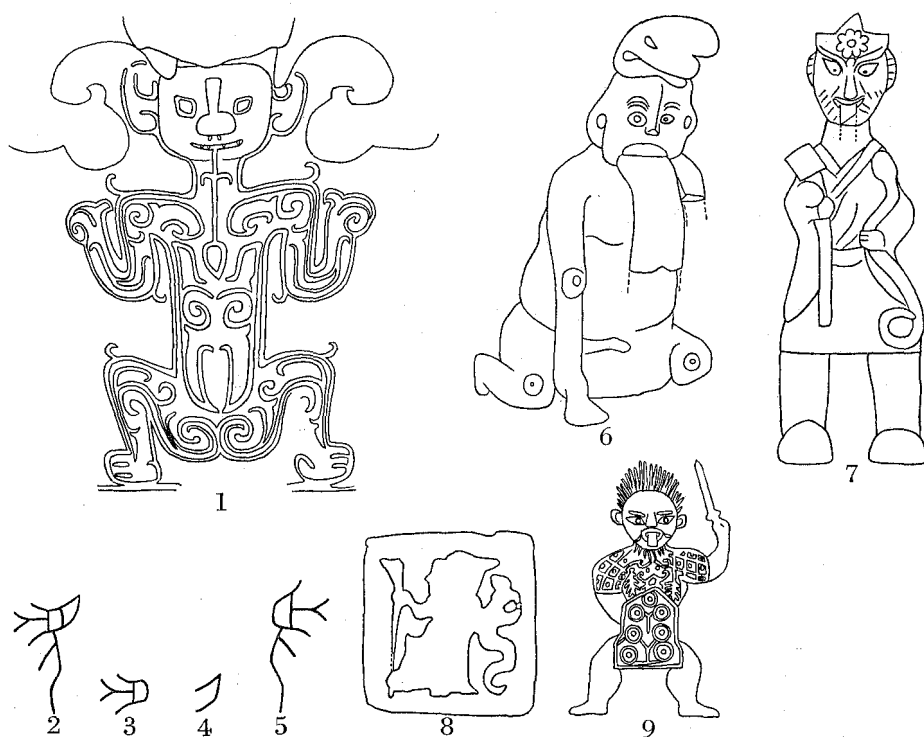
これらは必ずしもすべて同一の神を表わしたものとは思われないが、翟^ニ鳳凰の冠羽をつけた神の傳統が殷から戰國時代まで存続したことを證するものである。

帛書圖一、2の神の目立った特徴の一つは、口から細長い舌を出していることである。この特徴は右に引いた、頭上に羽根をつけた鬼神には認められない。

長い舌を出した人間形の神像のうち、最も古いのは圖一三、1に示した安徽省、埤南出土の殷中期風の尊に飾られたものである。手を舉げて蹲居する姿勢をとる。頭の上は、咬みついた虎の上顎におわれ、羽根が附いていたかどうかはわからないが、角張った頭に大きな耳がある點、共通點がないではない。口から、一見舌をもった草花のようなものが垂れているのは舌である。圖三、2-4に示したような形の舌の變種と見ることができよう。

筆者はさきに虎が髪を結はない人間に咬みつく、殷・西周時代の圖像的表現を、神虎が鬼神を食うモチーヴと解釋した。ここに引いた圖一三、1も同じもので、虎に食いつかれたこの鬼神は、畏怖すべき鬼神であつたと考えられる。

殷時代の人間形の鬼神で舌を出した圖像は他に類例を思いつかない。甲骨文字でいえば圖一三、2のごときものがある。下



圖一三 1. 埤南朱碧區出土尊紋様 約 $\frac{1}{2}$ 2・5. 甲骨文字 3・4. 2の説明圖 6. 廣州市東郊出土陶俑 約 $\frac{1}{6}$ 7. 重慶市化龍橋附近出土陶俑 約 $\frac{1}{6}$ 8. 畫像印 約 $\frac{1}{1}$ 9. 義烏縣城附近出土黃釉陶甗紋様 約 $\frac{1}{6}$

部の圖四、7形は勿論人間である。上部の圖一三、3形は、圖三、3形を横にしたもので、脇に出ているのは舌に違いない。ただ圖一三、3形で、口にあたる部分の上下に出た劃が外に反っている。これは龍字の頭の表現に共通する。上に着く圖一三、4形は虎字の耳の表わし方と同じである。この文字全體はすると、舌を出した獸頭人身の姿で、その獸頭は虎のような大きな耳に龍のような頭の形、ということになる。この文字は甲骨文で地名ないし部族名に使われている。⁽⁵¹⁾

圖一三、2とよく似ているが、耳を缺いた文字も甲骨文にある。圖一三、5がそれで、やはり部族名として使われている。⁽⁵²⁾

圖一三、2と5の文字は同じく武丁時代の卜辭に現れ、形が近いから或いは同じ文字かもしれないが、證據がないので斷定しかねる。

長い舌を出した人間形の神像は、殷以後、戰國時代まで資料が缺如している。戰國時代になると、長い舌を出し、鹿角を着けた木彫半身像が長沙か

ら發見されることは、サルモニー氏が紹介したところである。⁽⁵³⁾これと同系と思われる神像は廣州東郊の後漢の墓から發見されている(圖一三、6)。報告者は鎮墓俑と名づけ、

頭上には巾を纏い、長い舌を出し(一部は缺失)、兩手は甚だ長く、獸蹄形に似て地上につき、兩足は甚だ短く、體の後に曲げて坐る

と記している。⁽⁵⁴⁾後漢時代まで舌を出した長沙の墓の守護神の傳統が繼續していることを證するものであろう。

圖一三、7は重慶市、化龍橋の後漢時代の墓から出たもので、「頭に花を挿し、舌を伸出し(缺失、右手に斧を執り、左手に蛇を握る」と記述されている。⁽⁵⁵⁾片手に蛇、片手に武器を持つ神像は、畫像印にも見かけるところである(圖一三、8)。このような神が何と呼ばれたものか今のところわからないが、斧は刑罰を象徵する。この神は刑罰、死を司ったものであろう。舌を出した貌はこのような神に似つかわしいものであったことが知られる。圖一三、9は浙江省義烏縣城附近の前漢墓出土の黃釉甗の耳に飾られたものである。鎧を着けて怒髮天を衝き、片手に劍を振り上げている。口から舌を出しているが、この例も舌を出した顔が威嚇の表現であることを證するものである。

ここに引いた戰國以後の例では舌の形が高等動物の舌の形をしている點で帛書の圖一、2のものと相違があり、また身體の特徴に多少とも差違がある。しかしこれらの例は第一に戰國時代の舌に對する觀念が後漢時代まで繼續していることを示し、第二にこれらによつて後漢時代に舌を出した顔が威嚇の表情であつたことが知られ、これを以て戰國時代の舌を出した神像が象徵するところを類推することができるのでここに引用した。

(14)

以上、帛書の十二神の各圖像について、それに對應する文獻の記述、同時代及び更に古い時代の對應する圖像を探してみた結果を表示すれば、次のごとくである。

圖像番號	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
文獻の記述						○	○	△	○	△	△	○
戰國時代の圖像		○				○		△	○			○
戰國より古い圖像		○(殷—春秋)				○(殷)	○(殷)		○(殷)		△(殷—西周)	

○—ほぼ對應するもの

△—不確實ながら對應するもの

帛書十二神の圖像のうちには、圖一、3・5のごとく圖像が不明瞭で、この章の研究の對象となし得ないものがあるから、それを除けば十柱となる。この十柱のうち、表でみるごとく約三分の一が戰國時代の圖像、戰國及びそれ以後の文獻の記載にほぼ對應するものが見出され、殷時代に淵源の認められるものも、大體同じ割合で發見されたこととなる。中國先秦時代の關係資料の貧弱さを顧慮すれば、この數字は決して小さいものとはいえないであろう。

右の各節に引いた圖像の比較の材料は、楚國のものに限られていない。出土地の不明なものも多いが、帛書の神に對應するものは全國各地出土のものに見出されるといってよいであろう。これらの圖像は工藝品に飾られたものであるから、その發見地は必ずしもその神の信仰のあった地域であるとは限らない。交易、贈與等による移動が考えられるからである。とはいえ、圖像の細部の相違、表現様式の違いは製作地の多様性を示す。各地の工人はその土地に熟知の鬼神を器物に表わしたに相違ない。そこで次のように言うことができるであろう。即ち、帛書の十二神は楚國に獨特のものではない。戰國時代、中國各處に同様な特徴をもった神がいると信ぜられ、また圖像に表わされていたのである、と。

文獻の記述と帛書の神の特徴の比較研究の結果も同じことを示す。即ち、帛書の神に對應する特徴の記述をもった神は、楚以外の土地に散在しているのである、と。同じ神の信仰の本據が中國の南北廣い地域にわたって散在している事實は、もっと有名な神については、誰しも知っていることである。神巫に關聯して例を引いた巫咸⁵⁶がそうであるし、舜でも、禹でも、忽ち幾つかの例が思い浮かべられるであろう。

「中國古代の神巫」においては、帛書の十二神の名の研究から、これらの神は當時中國各地で信仰されていた巫神のうちから、編者が自己の理論にしたがって十二柱を選び出し、占いの書の形に秩序づけたのであろうことを推定した。この章では帛書の十二神のうちの幾つかについて、それと共通な圖像的特徴をもった神々が、中國各地にいると信ぜられていたことを明らかにした。然し、不幸にして名前の一致するものまでは見出すことができなかった。また文獻中の姿の特徴の記述が帛書の神の特徴と一致するものの中に、はつきりと巫神であることが知られるものも発見し得なかったのである。

戰國時代、中國各地の神々はその土地に根を下して以來長年月を経、或いは獨自に發展し、或いは他の神と習合して、例えばこの章の第(5)節に引いた肥遺のごとく、同じ名の神が土地によって異なった姿となり、或いは同じ姿のものが別の名で呼ばれるというような複雑な様相を呈していたのである。この神々の割據時代から殘存した僅かな文獻中に名の遺る神々は、それでもかなりの數に上り、更に偶然發見される遺物に表わされた鬼神の圖像も少なくないのであるが、名と圖像がうまく合致するものに至っては、一體幾つあるであらうか。

この状況を顧慮すれば、圖像の研究の結果、帛書の神名と巫神たるの屬性までが一致するものを見出し得なかったのは、單に萬に一つの幸運に恵まれなかっただけのことと考えるべきであらう。とはいえ、本章は「中國古代の神巫」の論文の推論の状況證據を提示するに止つたのである。

なお神巫の論文においては、戰國時代の巫、神巫が卜辭の研究によって殷時代に遡りうるものであることを記した。この章においては帛書の圖像に對應する殷時代の圖像を、四柱についてどうやら探し出すことができた。圖像の研究だけによつては、その神の屬性、それに對する祭儀などを十分明らかにすることは困難であるが、特に古代中國のごとく傳統に斷絶のない國においては、一般的にいつて、同じ系統の神像の存續は、同系統の信仰、祭儀の存續を豫想してよいであらう。即ち帛書の神像に對應する殷時代の圖像の存在は、戰國時代の巫・巫神の傳統が殷時代に遡るであらうとの推論の傍證と考えることができるであらう。

二 帛書十二神に反影された楚文化の地方性の問題

最後にこの帛書十二神に反影された楚の地方性の問題についてあらましを記しておきたい。

蔣元伯⁽⁵⁷⁾は長沙出土の遺物について、それが中原の殷周文化と全く趣きを異にし、楚民族が地理的關係で戰國時代まで民俗・藝術上獨立の傳統を保持してきたことを強調している。A・サルモニー⁽⁵⁸⁾も同様楚文化の地方的特色を強調する立場である。

これに對し、地方性を強調し過ぎるのを戒める意見があり、筆者もこの立場である。安志敏・陳公柔⁽⁵⁹⁾は帛書圖像中の雙角長舌の怪獸は楚國領域内出土の鎮墓獸と形が似ており、安易にこれを楚墓に特殊的なものとしなすのに對し、このような鎮墓獸の同類は、同時代及び後の時代に中國各地に見られ、必ずしも楚に限られないことに注意している。筆者も鹿角及びこれを着けた鬼神について同様なことに注意した⁽⁶⁰⁾。また山海經その他の古典に記される鬼神には、帛書の神と共通な特徴の記述をもつものが、楚以外の地方にいとされ、また帛書の神と共通な特徴をもった鬼神の圖像の飾られた遺物も、出土地の明らかなものでは楚以外の地域から出土するものも多いことは、前章によって明らかであろう。そうすると、帛書の十二神には特別に楚の地方文化の特殊性は認めない方がよいであろうか。

楚はもと蠻夷の國といわれ、春秋時代初めに、中原地域の人によって楚が後進の野蠻國とみなされていたことは疑いない。しかし、實際にどのような文化の相違があったのであろうか。現在の中國人と、中國南部の少數民族ほどの違いであったか、それともフランス人がドイツ人をそう感ずる程度のものであったか、慎重に検討して見る必要がある問題である。

李亞農⁽⁶¹⁾は楚が中原文化に同化されていった過程について、次のように記している。即ち、楚の國は春秋の初めには未だ楚王が自ら蠻夷と稱しており、中原と比べて後進の部族の住む地域に留っていた。それが前六世紀前半、共王時代には「蠻夷を撫し、南方の境域外を征服し、これを中原文化國に屬せしめる⁽⁶²⁾」という意識に變っている。春秋時代、中國文化の主流を荷なっ

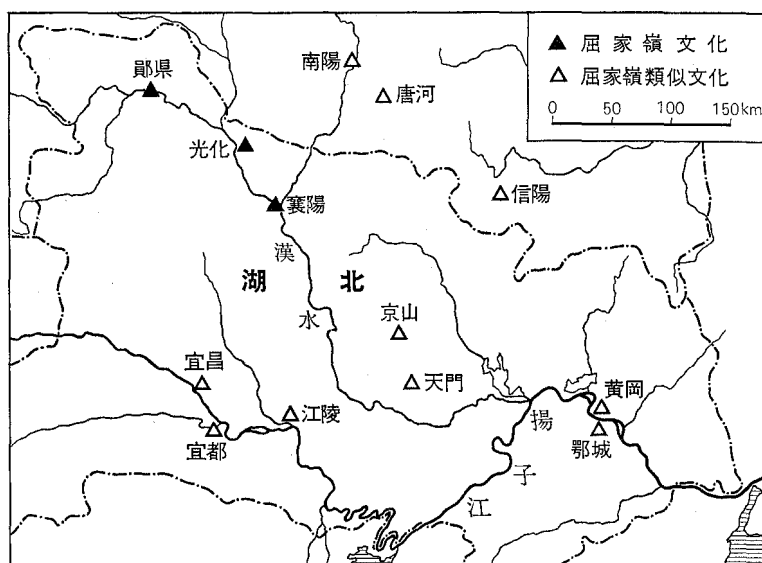
た部族と、これと雜居し、またその周邊地域に住んでいた後進民族との混血、文化的同化が急速に進行している。文化的同化の象徴的な事例として、春秋後期になると蠻夷が會話に詩經の引用を混えるに至っていることがあげられる、と。

李亞農はつづいて次のようにいう。即ち、戰國時代に入ると、また楚辭の天問がある。つまり、屈原が追放されて後、楚の先王貴族たちの廟に遊び、許多の壁畫をみた。壁畫には古代史の傳説が畫かれており、屈原はこれらの畫に對して問いを發しているのである。當時楚國の畫工は既に文化先進國の歴史をこのように熟知していたのである。これによってみると、北方の文化先進國の歴史は、南方の楚・呉などの共同の歴史になっていたのである、と。⁽⁶³⁾

貴族のうちの知識人が詩經を引用しうるに至ったことは疑いない。また文化先進地域より工人を招致することにより、器物・建築等の有形文化が急速に先進國並みとなったことも大いにあったことである。然し、神話の類はいかがであろうか。詳細な神話・傳説の知識は現實生活の上には關係がなく、貴族同志の教養ある會話に必ずしも必須のものとはいえない。これが春秋以後、北方から楚に入って來たものだとするには問題があるう。

天問には天地開闢より春秋時代に至る神話・傳説・歴史が問いかけの形で長々とうたわれており、特に周初以前のものに關するものが多い。これは聞く者のそれらに對する知識を前提にしている。漢の王逸は、天問にうたわれた題材は、楚の先王の廟、公卿の祠堂に畫かれたものであると解説している。これはおそらく正しいであろう。⁽⁶⁴⁾これが誤りとしても、天問がなにか公衆の目にふれる、周知の繪畫畫的表現を題材としたものであることは疑いない。

そうすると天問は、これを聞く者という點からみても、またその題材となった繪畫の方から考えても、楚國の廣範な大衆に、ここに扱われた神話・傳説に對する十分な知識があったことを證するものである。もし楚が、中原の人人が悪しざまにいうごとく南蠻鳩舌の民であったとしたら、このような知識の普及が春秋中期以後、僅々三・四百年の間に起ったとせねばならないが、そういうことが一體あり得たであろうか。筆者はそうは考えない。中國文化先進地域に傳わっていたと同じ神話・傳説の大系が、未だ蠻夷と呼ばれていた時代から楚にあった、と考えるべきである。考古學的資料がこの考えを裏づけるであろう。

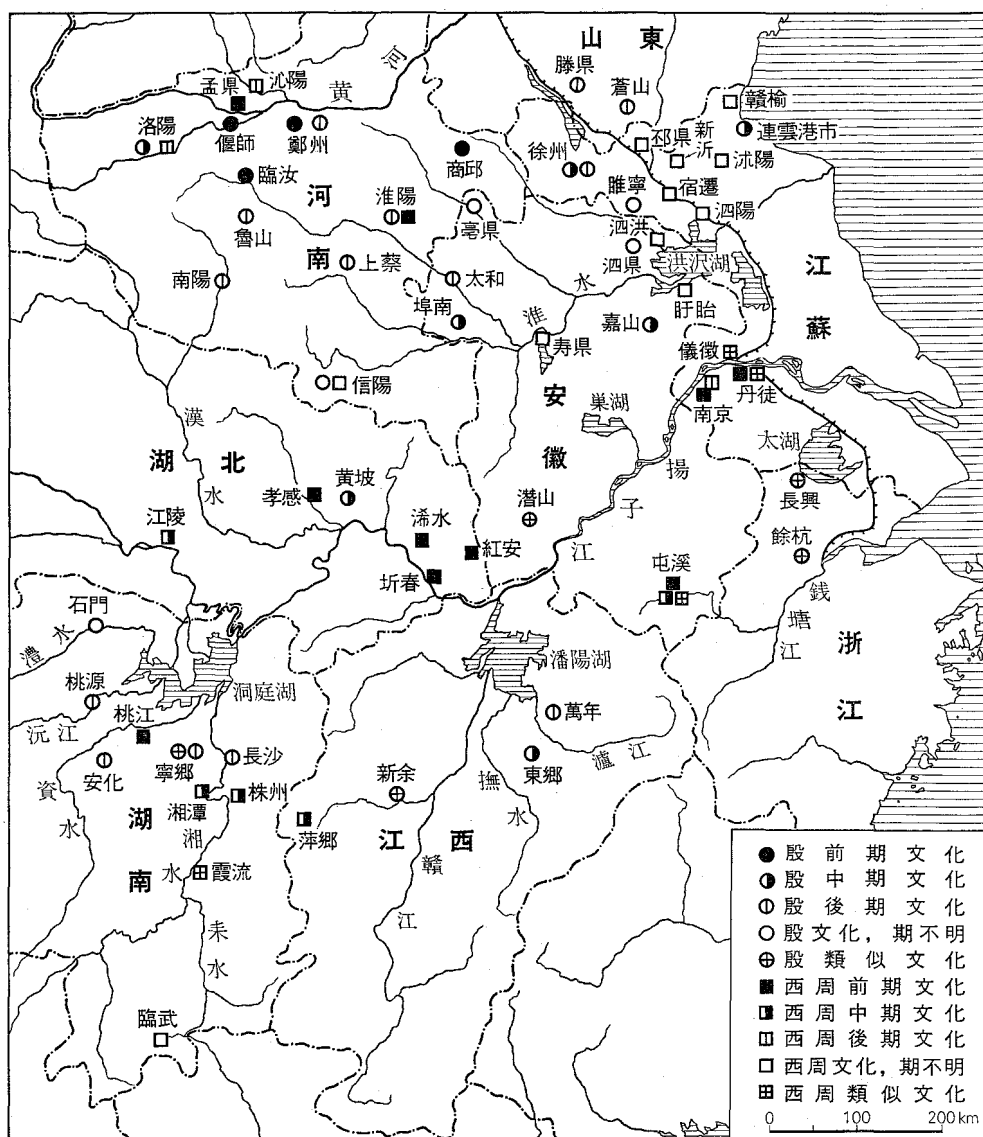


圖一四 屈家嶺文化遺蹟分布圖

筆者はさきに⁽⁶⁶⁾、中國の文化先進地域の人々が殷—春秋戰國時代に接觸し、野蠻人の名で呼んでいた部族は、實は彼等と同様仰韶—龍山文化の及んだ地域の人間であり、その系統の文化を受けついだ人人で、いわば田舎にとり残された遠い親戚と考える方が適切な人人であることを指摘した。春秋時代になって文獻の歴史にクローズ・アップされてくる楚もその例で、その興起してくる地域は仰韶—龍山系の屈家嶺文化が最初の農耕文化として現れる。この文化の荷ない手が人種的にどのようなものであったかは、人骨の調査がなされていないので明らかでない。同じ仰韶文化内の地方的差違とその荷ない手の體質人類學的異同は中原地域についても明らかにされていないから、この問題はここには論じまい。この文化の遺蹟の分布狀況は、圖一四にみるごとく、後に楚が興起する地域に合致している。この文化が楚の文化の基礎となったことはほぼ疑いない。

中國の神話の發展過程は、春秋以前の時代については、殷時代に斷片的資料が知られる以外、明らかにされているというにはほど遠く、龍山文化の時代については今のところ知る術がない。しかし、屈家嶺文化の人人の神話が、北方黃河流域の人人のものと相當程度一致したものであったことは、その文化の系統からみて當然豫想してよいことであろう。

然らば、殷・西周時代についてはいかがであろうか。圖一五は殷・西周時代の青銅器出土地を主とした遺蹟の分布圖である。⁽⁶⁶⁾ 地域によって考古學遺蹟の發見の契機となる經濟建設の進行狀況や、考古一般調査の進歩の度合いに相當大きな差違があるの



圖一五 華中地域殷・西周文化遺蹟分布圖

で、この分布圖が正しい情勢を示すというにはほど遠いものがあるに違いない。しかし、東の安徽・江蘇方面に比して、西の湖北・湖南地方に殷・西周遺蹟が遙か南方にまで擴がっていることは、およそ誤らないことといってよからう。前者の地方は南京博物院を中心とした有力なスタッフによって、一般調査がかなり進んでいるに對し、後者は調査陣の點から手薄の感がある事實は、この判斷の信憑性を強めるものである。殷中

期遺物は、東方では淮河の少し南の嘉山で止るに對し、西では漢水下流の黃坡、江西省の東郷に發見される。殷後期遺蹟となると、東方では殷中期よりも北に後退し、江蘇・安徽の北境で止るに對し、西方では湖南省、洞庭湖の南にかなり大量の遺物の發見地が濃く分布し、江西にも及んでいる。殷後期のこの狀況は、殷墟卜辭の示すところとよく對應する。即ち、卜辭の征戰を占った記事には、殷の西方、東方及び東南方に對するものが大量に見出されるに對し、南方に對するものはなく、南方の國に關係することが知られる稀な例は、いずれも朝貢に關したものである⁽⁶⁷⁾。

これはおそらくこういうことと考えられる。即ち楊子江下流、南京を中心に東西一五〇キロほどの地域に湖熟文化が濃く分布し、その年代は殷から西周初に及ぶものとされ、これは古典に荊蠻と呼ばれた民族の文化と考えられており、この文化は安徽省の淮河流域にまで擴がっている⁽⁶⁸⁾。この文化の下層からは河南省鄭州などで見られる殷中期のものと同じ印紋陶が發見されている⁽⁶⁹⁾。おそらく殷中期に早く淮河を越えて進出した中原の青銅器文化を受け入れて發展し、急速に強力となった湖熟文化の荷ない手である荊蠻は、殷後期には殷に對抗してその進出を阻止するようになったものであろう。

これに對し、殷の湖北・湖南方面への植民は成功し、この方面とは友好的關係が保たれたのであろう。洞庭湖に注ぐ四つの河、湘・資・沅・澧の諸川の流域には、それぞれ、殷の青銅器の發見があり、特に寧鄉縣では殷後期の青銅器が多數掘り出されている。この方面への進出は勿論漢水を通ずるルートによったものと考えられる。

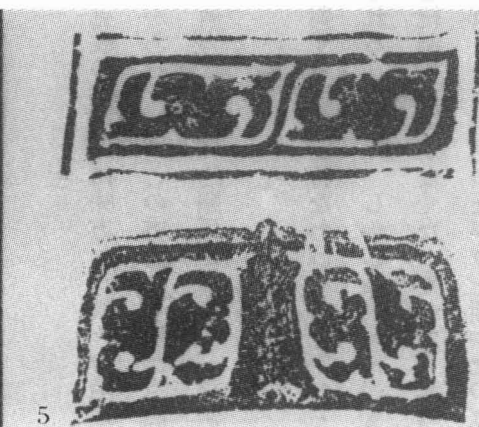
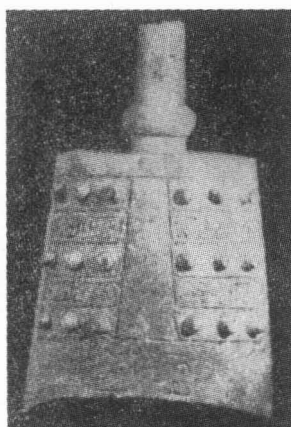
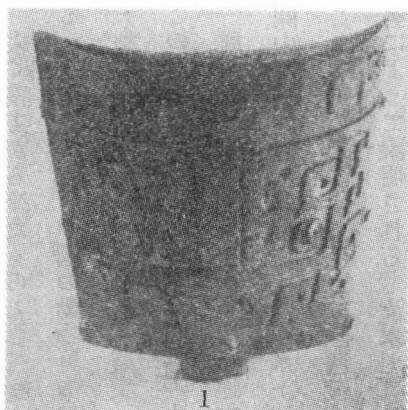
この湖南省の殷植民地の分布は、戰國時代の鄂君啓舟節に通商活動が許されている地名と對比すると興味深い。即ち、前記の殷遺蹟のある四つの川、湘・資・沅・澧はこの節に並んで現れる⁽⁷⁰⁾。またこの節に記される湘水の上流の耒水も、それから遠くないところ、臨武に、殷ではないが西周の青銅器が出ている。殷時代のこととは勿論、戰國時代、これらの地方で具體的にどのような物資の交易が行なわれ、どんな商業上の利益が得られたものか、ここにくわしく研究する餘裕はないが、戰國時代に商業上重要であった河川の流域には、殷時代の青銅器が分布しているのである。これらの地は、殷人の交易活動の基地として、早く植民が行なわれたのであろうことは、ほぼ疑いなからう。

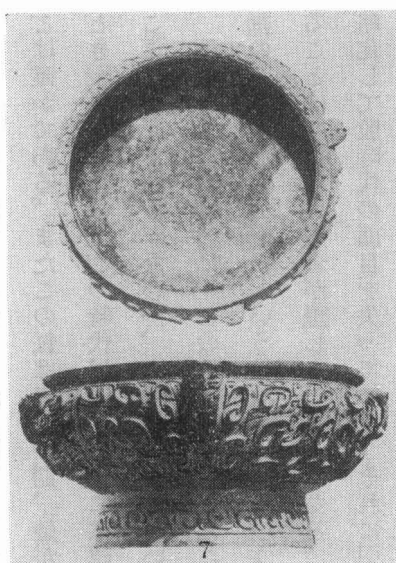
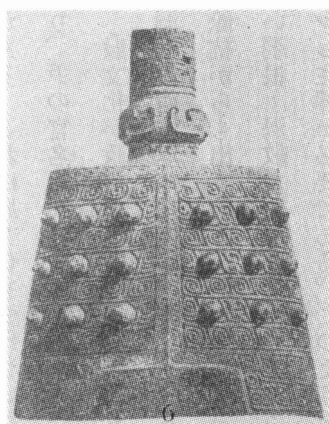
よく南方から来たものとして引かれる殷墟から出土する動物質遺物のうち、何が間違いなく南方から運ばれて来たものであるかについては、中國の動物分布の變化、氣候變遷の問題も絡んでくるので慎重な検討を要するが、例え(72)ば龜トに用いられた大型の龜の中には現在福建・廣東・廣西・海南島・臺灣等、南方のみに産するものであると判定されているものがあるから、(73)このような物資はこの漢水から湘水を通じて廣東に至る交通路によって運ばれたと考えられよう。

周は克殷前より、漢水・淮河地方に勢力を伸ばしていたという説がある。即ち徐中舒(74)は周の大王は岐山の下に移るとともに、關中から秦嶺山脈を抜けて漢水上流地方に通ずる交通路のうち、最も古く開けていたことの知られる褒斜谷の通路を確保し、ここを通じて漢水上流より淮河流域に勢力を伸ばし、東夷を手なづけた。大王の子の呉大伯仲雍が呉に奔った傳説は、この形勢によって説明される。汝水上流の應・蔡などは武王の兄弟が封建された國である。これに近い、漢水の東の姬姓の國、隨・唐もこの頃に建てられたものであろう、と論じている。

周が克殷前に早く漢水上流への交通路を確保したであろうことは、徐中舒が記すごとく克殷の際に周に味方した國々の地理的位置からみても確かであろう。淮河・漢水流域の姬姓の國は、克殷後に封建された記録がある。故にこの方面にも周が克殷前に勢力を或る程度伸ばしていたかも知れないが、前引の殷代卜辭資料から知られる殷と南方との平和的關係からみて、周がこの方面に支配を及ぼしたのは殷の最末期のことと見るべきであらう。

金文資料によると、西周二代目の成王時代と、中期の初め昭王時代ごろに、この地方に對する遠征が行なわれたことが知られる。(75)これらの記録に對應するごとく、關聯地域には、西周前期・中期の青銅器が発見される(圖一五)。しかし西周後期のものは今のところ出ていない。史記によると、西周後期の夷王時代、周王朝が衰えて諸侯を統制する力がなくなったので、楚の君主熊渠は勝手に周邊の國の征服を始めたことが記されている。西周後期には楚地方が中原との政治的つながりを斷つたのは事實であらう。そのため、周王朝から與えられた權威の象徴として、文化中心地域で作られるのを常とした青銅彝器の流入が途絶えたものであろう。





圖一六 殷類似文化鈺ほか 1・2. 寧鄉
出土鈺 約1/10 3. 寧鄉老糧山
出土鈺 約 1/10 4. 潛山出土
鈺 約1/10 5. 新余出土鈺 約
1/10 6. 長興出土鈺 約 1/10
7. 長興出土簋 約 1/6 8. 餘杭
出土鈺 約 1/6

ところで、ここに粗描したとき、殷中期から西周中期にわたって進出して來た中原文化の多數の殖民地が、楚の地方にどのような文化的影響を與えたかについては、資料不足のため、現在のところ多數の遺蹟の發掘を基礎とした確かな考古學的證據に基づいて跡づけることは不可能である。

殷遺蹟の數の多いこと、及び楚地方が殷王朝に友好的であつたことからみて、この地方の情勢が、敵對的な異民族の中に殷人の植民地が孤立的に保持されているだけ、というようなものではなかつたと考える方がよいであろう。この地方では殷文化は、そのすぐ前の殷階であつた龍山文化と同系統である屈家嶺文化に、圓滑に接木されたものではなからうか。

高度の貴族社會に殷文化が引きつがれてゐることは、春秋戰國時代の楚の官名にうかがわれる⁽²⁶⁾。即ち、例えば楚は「令尹」、「大攻尹」などのごとく、長官を尹と名づけるもの

がある。これは周文化を受けついだ北方諸國に見ないところであるに對し、殷にこれがある。有名な伊尹のごときがこれであり、尹の官名は甲骨文にも現れることはいうまでもない。

殷文化が政治の傳統ばかりでなく、また宗教の方面でも楚の地に根を下したことが、青銅器遺物からうかがわれる。それは洞庭湖南岸寧鄉縣に多數發見される大型の鉦である(圖一六、1—3)。同式のものには江西省の新余、安徽省潛山、浙江省の長興、餘杭からも出ている(圖一六、4—8)。圖一五に殷類似文化として印してあるのがそれである。この式の遺物は器全體がやや荒い羽根—渦紋でおおわれているところに著るしい特色がある。この式の遺物は普通、殷乃至周初とされているがそれにはもう少し注釋が必要である。このような羽根—渦紋で器全面を飾る方式は、中原地域から出る殷、周初の青銅器には見られない。またこの式の大型の鉦は中原からは出土しない。北方の、殷の王都から出るのは、むしろみすばらしいとさえいえる、簡素な饕餮紋をつけるだけの、高さ二〇cm以内の鉦だけである。するとこの高さ數十cmもある大型の鉦は楊子江流域地方で作り出された、この地方獨特のものであることは確かである。

この遺物の年代であるが、これと同じ原型を組合せて形成された羽根紋様の青銅器の現われる、殷中期以後のものであることは確かである。またこの鉦は春秋中期、楚が興起する時代よりも古いものと考えねばならない。この遺物に飾られているとき羽根の紋様は、この時代以後の遺物には認めれないからである。更に正確な年代については、詳細な考證を要するので、ここには記す餘裕がないが、大略殷—西周といつてよいであろう。

ところで右の時代に、この地方で作られたこの式の鉦の紋様には、實に完璧な殷式の羽根の紋様が驅使されており、一點一劃の誤りもない。羽根という紋様要素は、殷文化の鬼神の表現にあらゆる形で使われ、神性を表わす機能があったと考えられることは、以前に筆者が證したごとくである。⁽⁷⁸⁾この紋様要素は黃河・渭水流域地方では西周に入るとともに固定し、次第に簡略化して殷時代の面目を失っている。それに引きかへ、楚の地方ではこの殷式の羽根が、單に古い殷の方式が正しく模寫されるという形ではなく、獨特な形で組合され、異なる趣きの紋様に形造られながらも、羽根の原形が正確に保持されている事

實は、どう解釋すべきであらうか。

これは次のように見るほかはなからう。即ち、殷文化の青銅器を飾る紋様要素は楚地方に完全な形で移植され、發展を遂げた。この紋様要素は、殷文化の宗教的象徴として最も基本的なものであった。これが誤りなく繼承され、新しいモチーフを形成しているのである。すると殷の宗教的觀念は、殷周革命のあとで變貌していった時代にも、楚ではそのままの形で生長を續けていたことは疑いない、と。また楚の地方で、この殷の小さい鉦が大型化していることは、それを用いる儀式の存續ばかりでなく、盛大化を象徴するものと解釋できるのではなからうか、と。

ところで中原の殷後期遺蹟から出土する、三個一組になった鉦が、實際にどのような機會に、どういう方法で使われ、またどういう機能を果たしたかについては、明らかでない。然し、これと起原的に確かに關係があると思われる西周中期以後の鐘については、その銘文によって若干の推測を加えることができる。西周後期の字體で書かれた宗周鐘の銘文には、作器の由來を記した後に

倉、恩、雉、雛、用卽各丕顯祖考先王

とある。倉、恩、雉、雛、は鐘の音の形容詞。卽各については白川氏がこ⁽²⁹⁾ういう。

卽各は詩にいう昭假。大雅烝民に「天監有周、昭假于下」、魯頌泂水に「允文允武、昭假烈祖」とみえ、烝民の箋には「其光明乃至于下」とするが、卽各とは祖靈の來格をいう。烝民の釋文に「昭假、音格、至也」とあり、假・格は同音。天より格る意である。

と。美わしい音色で打ち鳴らされた鐘の音は、父祖の靈魂を呼び寄せる働きをもつものと信ぜられていたことが知られる。父祖の靈は勿論呼び寄せられた上で祭祀を受け、この銘の前引の條のすぐ次に記されているごとく、祭祀者やその子孫に多くの福と長い壽命を與えてくれることを期待されているのである。遙か後世、戰國時代になっても鐘の用法にはこの靈魂を昭格させるという本來の働きの痕跡が認められる。即ち、周禮、春官、大司樂の條に

以六律六同、五聲八音、六舞大合樂、以致鬼神示、……

というごとく、音楽には人間の靈魂や自然神を呼び寄せる力があると信ぜられているのであるが、各種樂器を用いる音楽の中で、鐘は音樂の最初に奏せられることになっている。周禮、春官、鍾師に「鍾師掌金奏」とあり、注に

金奏擊金以爲奏樂之節、金謂鍾及鐃

と説明されるごとくである。靈魂、自然神を呼び寄せる力は、各種の樂器の中でもとりわけ鐘の類に優越しているという考え方の傳統が戰國時代まで續いていたことが知られるのである。

こう見ると、殷後期に中原で使われた小型の鉦も、鬼神—祖先の靈や自然神の類—を祭祀の場に招致するために使われたであらうとは、ほぼ確かなことと推測される。今問題の大型鉦も同様な用途をもったものであることは推測に難くない。

早く殷中期に楚に入ってきた殷文化が、この地方に根を下し、獨自の發展の道をたどっていったことは、前記の鉦の證據からみてほぼ疑いないところである。

殷の政治の傾向を評した孔子の言葉として、

殷の人は神を尊び、民を率いて神に事え、精靈を祀ることを先にし、禮を後まわしにした

殷人尊神、率民以事神、先鬼而後禮

という言葉がある。⁽⁸⁾ 殷時代の卜辭にただ多數の祭祀の對象に對し、多くの種類の祭祀を行なうことを占っているのをみると、この言葉は確かにうまく言い當てているといえよう。ところで楚の風俗として楚辭、九歌の序に、

昔、楚の南郢の町や、沅江、湘江の間の地方では、その風俗として精靈を信じ、祭祀を好んだ。祭祀を行なう時は、必ず男女の巫に音樂を奏せしめ、歌舞を行なわせて神を樂しませた

昔楚南郢之邑、沅湘之間、其俗信鬼而好祀、其祀必使巫覡作樂、歌舞以娛神

とある。この祭祀に憂身をやつす信心深い傾向は、まさに殷人の傾向と一致する。ここにいはれる湘江・沅江の間というのは、

まさに本格的な殷の青銅器が多く出土し、また右に記した大型の鉦が出土する地である。そしてこの大型の鉦こそ、鬼神を招致して祭祀を行なうため第一等に重要な役割を演ずる樂器なのである。殷文化が移植され、そのまま發展を遂げたのが漢書地理誌に⁽⁸¹⁾

巫や精靈を信じ、過度の祭祀を重んずる

信巫鬼、重淫祀

といわれる楚の風俗と考えて間違ひなからう。郭沫若は「徐・楚の文化は殷文化の嫡系だ」といつている。⁽⁸²⁾ 郭氏は何の根據も示していないが、その直観は當っている。

楚で殷文化がそのままの方向に持續・發展を遂げている間に、北方黃河流域の中國文化の主流をなす地方では、周の禮を重んずる文化が普及し、殷後期文化の方向は大きく是正されていた。禮記、表記の前引の言葉のつぎに、

周の人は禮を尊んで施すことを尙び、精靈を祭り、神を崇敬しながらも、これと或る程度の距離を保つようにした

周人尊禮尙施、事鬼敬神而遠之

と要約されているごとくである。こういう方向に進んでいった北方中原地域の人人の目からすると、楚は確かに異端な野蕃人と見えたに相違ない。これが春秋時代の中原の人人の楚に對する評價の眞相と思われる。

然し、周人が敬して遠ざけた鬼神は、何も抹殺されたわけではなく、殷時代以來各地に根を下して祭祀を受けていたのである。楚地方の遺物に表わされた鬼神の姿が中原地方のものと豫想外に差違がないのは、楚地方の文化の基礎にある仰韶・龍山系の屈家嶺文化、その素地の上に移植された殷文化の傳統の存在を認識して始めて誤りなく理解されるのである。また楚辭、天問が北方地域と共通な神話を題材にしている事實も、この楚文化の系統を知れば、何の不思議もなく理解されるはずである。

本章の最初の問題にもどって、帛書十二神には、然らば楚文化の地方性はどのように反影しているであろうか。圖像學的研究から、帛書に畫かれた個々の神の出自にこれが認められないことは、前に記したごとくである。また一見異様にみえるこれ

らの神々の表現に、雅醇であるべき中國文化とは異質な、楚の野蠻人の文化、といったものを考えることが當を缺くことも、前記のごとくである。帛書十二神に反影された楚文化の特異性は、それらの神々を中國各地から選びだした、その基準にあると考えるべきである。「中國古代の神巫」で筆者は、これらが神巫であろうことを推測した。巫覡の信仰は前引の漢書地理志に記されるごとく、楚地方の著しい特色とされている。楚の偉大な文化的所産である楚辭も、この地方の巫祝の文學に根ざすものであることは、多くの研究者の指摘するところであり、その著しい特色である神祕的・宗教的な色彩は、この楚地方の民俗によつて説明されている。⁽⁸⁹⁾ 帛書十二月の運勢を司る神として十二柱の神を秩序づけるのに、神巫を撰り出している事實にこそ、楚の地方文化の反影を認めるべきであると考ええる。

注

- (1) 一九三四年、長沙近郊の楚墓から發見された絹で三八×四六厘ばかり、二段に分けて墨書の文字があり、その周圍には彩色で鬼神の畫像が畫かれている。畫像各々には附隨した關聯の文字が伴っている。中央部の文は自然界運行の秩序の成立に關聯した神話と、歳月の吉凶、行動規範についての指針などで、四周の畫像に伴う文字は十二月神の名と各月の吉凶である。幾人かの學者が研究を發表し、筆者も文字の考釋を東方學報に掲載した(林一九六四、林一九六六)。
- この帛書に關するシンポジウムが一九六七年ニューヨークで行なわれ、そのプロシーディング *(Early Chinese Art and its Possible Influence in the Pacific Basin, edited by Noel Barnard, New York, 1971)* は近刊豫定になっている。また N. バーナード氏による従來の研究の成果をとり入れた研究書が精良な圖版と共に近く刊行される (Barnard 1971a)。
- (2) この論文の第一章の概要は右に記したシンポジウムで發表され、プロシーディングに收載されている。
- (3) 林一九六四、八四—六。
- (4) 楚のものでいえば、例えば江陵、望山一號墓出土の彩繪木彫小屏
- (5) (湖北省文化局文物工作隊一九六六、圖版二)、三晋地域のものでいえば例えば輝縣琉璃閣墓五九出土の壺(郭一九五九、圖版九三)の最上及び最下段。
- (6) 墨子、明鬼下。本文に鄭の穆公とあるのが秦の穆公の誤りであることは、孫詒讓、墨子閒詁のこの條に注記されるごとくである。
- (7) 林一九六〇、一三一—一七圖
- 林一九五三、二二—二頁
- なお、山海經、海外南經に岐舌國があり、郭璞の注に「その國の人の舌は皆枝分れしている。また「支舌」ともいわれる」とある。或いはこの傳説は圖三、4 のような舌が枝分れた人間の表現に由來するものかもしれない。
- (8) 梁、高一九六二、上、五六頁
- (9) 郭璞の注に、「殷の湯王の時この蛇が陽山の下に現れた」、という傳説が引かれている。
- (10) 林一九六七、一九九頁
- (11) 林一九六〇、二四—三四頁
- (12) この神は圖にみるごとく全身鱗におおわれ、頭上には左右に二枚ずつ長い蘭葉狀の飾りが出、中央には楔形のものが立っている。兩耳

には蛇を珥として着け、右手には兩頭の龍を以て表わされた虹を、左手には四足の龍を掴み、腰には蛇を帯にして巻く、中腰になって踏張った足の間には四足の龍がおり、右足の下には日、左足の下には三日月をふまえている。これと共通な特徴の幾つかをもつ神像は、各地發見の遺物や山海經などの文獻に見出されるが、諸特徴が總て合致するものはなく、何と呼ばれた神であるかは明かでない。

- (13) 白川靜氏は(白川一九五六、六九—七〇頁)これを頭、または口とする説を紹介したのち、祝告すべき文章を記した書冊の容器を頭に載せた形と解釋していられる。

- (14) 胡一九四四、初集、第三冊、武丁時代五種記事刻辭、二—二、五九—六〇、六二、六五葉

- (15) 國ないし部族を表わす記號がその部族の何を象徵するものであるかの問題は、繁雜な考證を要し、ここには記す餘裕がない。林一九六八を參照されたい。

- (16) これと近いものは水野一九四八、圖一、13にもある。

- (17) 四目の神は沂南畫像石墓、中室南壁に畫かれており「蒼頡」と題されている(曾等一九五六、圖版五二)。報告書には王充論衡、骨相篇の

蒼頡は四つ目で、黃帝の書記となった

という條を引いて四目という傳えのあった證としている(同三九頁)。

これは原石に「蒼頡」と題字があるから確かであるが、圖五、3の場合には四目だからといって蒼頡とするわけにはゆかない。

- (18) 楊一九四一、三八七—九頁

- (19) 徐中舒も(徐一九三五、六一—四頁)秦の祖先女脩は玄鳥の卵を呑んで大業を生み、柏翳(伯益)の子の大廉も鳥俗氏といわれるなど、その一族に鳥と關係深い傳説のあることに注意している。

- (20) 楊一九四一、三八九頁

- (21) 上海博物館一九六四、附冊、六九頁

- (22) 林一九六六、一五—一八頁

長沙出土楚帛書の十二神の由來

- (23) 林一九六〇、四一—二頁

- (24) 鰐魚と魚の名をもちながら蛇のようだというのは奇異であるが海外南經に

南山はその東南にある。この山から先は、蟲を蛇といひ、蛇を魚と呼ぶ

とある。この類の呼稱であろう。

- (25) Salmons 1954, pp. 8-11

- (26) 同右 p. 9

- (27) 饒一九五八 a

- (28) 司馬相如の上林賦、「櫟蜚虞」の條。蜚虞は文選には蜚遽に作る。

- (29) これは三本の角がある。山海經、西山經に

獸がいて、その姿は鹿のようで尾が白い。足は馬、手は人間で四本角である。獯如(赫懿行は獯は獯の誤りという)と呼ばれる。

とあるこれは四本の角があるというが、この圖は或いはこの類のもりかもしれない。細長くうねった胴は龍の如くであるが、鹿の體をデフォルメして表現したと取れぬことはない。

- (30) Salmons 1954, pp. 7-16

- (31) 同右 pp. 49-50

- (32) 林一九六三、一〇三—五

- (33) 河南省文物工作隊一九五八、八〇頁、圖版五

- (34) 河南省文化局文物工作隊第一隊一九五七、二二頁

- (35) 安等一九六三、五七頁

- (36) 中國科學院考古研究所一九五六、圖版九四、23—25、一二〇頁

- (37) 河南省文化局文物工作隊第一隊一九五七、二二頁

- (38) 河南省文化局文物工作隊第一隊一九五六、二九頁

- (39) 齊一九五五、

なお洛陽濶西六區の二基の西周墓では、墓壙の填土中から他の獸骨と共に鹿の完全な骨が發掘され(馬一九五五)、安陽武官村一九五

○年發掘の殷時代大墓の墳土中にも鹿骨が猿その他不明の動物の骨と共に發見され、後者は殷の統治者が園囿中に飼っていたのを殉葬したものとして説明されている（郭一九五一、二二頁）。西周前期の貉子卣、命簋には王が臣下に鹿を下賜した記録がある（白川一九六六、八三〇—四二）。墓に殉葬された鹿のうちには、このような特別な由緒のある鹿もあるかも知れない。

- (40) 宮川、コラウツ兩氏は古今東西の例を引いて頭に鹿角を戴いた姿をシャーマニズム、トーテムイズムの關聯によって説明しているが（Miyakawa u. Kollautz 1966）中國古代の例はここに記したごとくで、その方面に結びつけるべき證據は今のところ見出し難い。

- (41) Salmons 1954, p. 51

- (42) 曾等一九五六、圖版四三、六一、六六、六八、七五他。

- (43) 元封二年、「還作……長安飛廉館」の條。

- (44) 鳳凰を爵ということは林一九六六、二五頁。

- (45) 「椎飛廉」の條。

- (46) 赫懿行は山海經箋疏でここに注して、郭注に「駢脚」という駢は駢、即ちたこの意味に解すべきだというが、それでは渠の意味が浮いてしまう。駢は駢駢の駢と取るべきであろう。莊子、大宗師に、せむしがよたよた歩いて井戸に自分の姿を寫したことを「駢駢而鑑于井」という。駢駢は畸型の足の者の歩き方の形容と考えられる。駢駢をまた駢駢ともいうが、駢は説文に「足が正常でないことだ」という。例えば羅一九一六、上、一三、四、李一九五〇、一六四のごとし。
- (47) この楔形のは、殷時代の饗饗面の鼻面にある楕形のもの（殷時代の羽根を二枚背中合せにしたもの）に由來するものであるが、その説明は複雑多岐に互るのでここには略す。

- (48) 林一九六六 a、一八頁

- (49) 林一九六〇、二四—三四

- (50) 例えば羅一九三三、五、六、四、同、五、一九、一五のごとし。

- (51) 例えば羅一九一二、四、五五、四、孫一九三七 a、七六六のごとし。

- (52) Salmons 1954, pp. 7-8

- (53) 廣州市文物管理委員會一九五五、六八頁

- (54) 胡一九五八、四三頁

- (55) 林一九六七、二〇四—六頁

- (56) 蔣一九四九、序

- (57) Salmons 1954, pp. 48-9

- (58) 安等一九六三、六〇頁

- (59) 第一章第(四)節

- (60) 李一九五六、一六六—七四

- (61) 春秋左氏傳、襄公十三年

- (62) 李一九五六、一七三—四頁

- (63) 漢時代の祠堂の畫像石にその畫像石にそのような例があるから、同時代の王逸は戰國時代にもあったと推測したか、或いはそのやうな知識をもっていたところからそう言ったのであろう。廟は勿論、墓に附屬した祠堂も戰國時代に存在したことが知られている（中國科學院考古研究所一九五六、一〇八頁）

- (64) 林一九六五、八三—四頁

- (65) 胡厚宣は（胡一九三四）ここに利用したとき考古學資料が知られない時代、文獻資料によって、周以前には南方民族は未だ存在しなかったと見（二〇頁）、楚民族が山東方面の東方民族から出たものであることを、次の各條によって推論した（二三頁以下）。一、楚の傳説的祖先の出目、二、楚邱の所在地、三、昆吾の所在地、四、周公東征の記録、五、金文中の楚伯を伐った記録、六、甲骨文資料、七、殷・楚の文化、禮制の共通點、八、象の南遷

- (66) 仰韶・龍山—殷時代に古く中原文化が楚地方に侵透している事實が知られた現在、この説は成り立ち得ない。本章で記すごとく、楚の文化、社會制度、楚と關係ある地名の中原地域とのつながりは、新石器時代以來の楚と中原との歴史的、文化的交渉を證するもので、周以後の民族の移動を證するものとはいえないであらう。

(67) 武丁時代に殷に敵對的であるのは、殷の西、北に在る方國であり

(郭一九三三、一一九葉、陳一九五六、二六九頁)、蠻と同定される茲が出て来るが殷の支配下の國としてである。殷末に大征伐が行なわれた人方も殷から東南方、淮河流域の方面に比定されている(陳一九五六、三〇五頁)。この東南方大征伐の時代、楚の先祖として史記に鬻熊と記される人物と思われるものが殷王朝に朝貢し、鹿を獻上したことを記した卜辭のあることは、董作賓の注意している所である(董一九四五、下、八一九葉)。

郭沫若は(郭一九三七、一一八〇片考釋)上引の卜辭に「歸伯を伐つ」という歸伯を、今の湖北省秭歸縣に當てられる春秋の楚の附庸の麇國に當てるが、これは揚子江流域、湖北省の西境に近い所で、地理的に僻遠に過ぎよう。また、詩、商頌、殷武の詩は、序に殷の高宗を祀る詩とし、高宗、即ち武丁が楚を伐つたことをうたったものとする。しかし商頌が春秋の宋の襄公の時の詩だとする説は漢時代から今文家の間に唱えられている。そして清朝以來の研究によって、この殷武の詩が宋の襄公の功をたたえたものであることは、ほとんど全く疑問の餘地なく證明されているのである(張一九三〇)。

(68) 曾等一九五九

(96) 張一九六二、三四頁

(70) 湘、資、沅諸川、郭沫若一九五八、四頁、澧水、殷等一九五八、一〇頁

〇頁

(71) 譚一九六二、一七八頁

(72) 林一九五八

(73) 胡一九四四、四、殷代卜龜之來源、九一〇葉

(74) 徐一九三六、一五八—一六二頁

(75) 白川一九六二、一六頁、白川一九六六、七七—七九三頁

(76) 胡一九三四、三三頁

(77) 陳一九五六、一二五—一七

(78) 林一九五三、一九〇頁

長沙出土楚帛書の十二神の由來

(79) 白川一九六七、二七一頁

(80) 禮記、表記

(81) 八、下

(82) 郭一九三七、序、二頁。同様な意見は丁迪豪が記しているという(胡一九三四、三八頁引)。

(83) 星川一九六一、二二四—二六

挿 図 目 録

圖一、長沙出土楚帛書周縁の畫像、Barnard 1971, fig. 4B, 4C

圖二、信陽長臺關一號墓出土瑟紋様、林一九六一、圖14

圖三、1 輝縣琉璃閣六〇號墓出土壺紋様、郭一九五九、圖版八四

2 青銅甗紋様、梅原一九三三、圖版一二九

3 甲骨文字、中國科學院考古研究所一九六五、六六三頁

4 甲骨文字、中國科學院考古研究所一九六五、三六九頁

5 作冊大方鼎紋様、容一九三六、圖版四三

6 安陽侯家莊一〇〇一號墓出土木器殘痕、梁、高一九六一、挿圖二九

7 玉璜、梅原一九五五、圖版八四左上

圖四、1 輝縣琉璃閣一號墓出土銅簋紋様、郭一九五九、挿圖二九

2 信陽長臺關出土瑟紋様、林一九六一、圖14

3 同右

4 同右

5 荊門漳河車橋附近出土青銅戈紋様、王一九六三、圖一、龔一九六三、圖一

六三、圖一

6 甲骨文字、中國科學院考古研究所一九六五、七九二頁

7 10 圖6の文字の説明圖

圖五、1 信陽長臺關一號墓出土瑟紋様、林一九六一、圖14

2 畫像印、陳一九二二、三〇、四八葉表

3 青銅劍紋様、劉一九三五、一〇、一〇一葉表

- 圖六、 1 青銅鏡紋樣、Palmgren 1948, p. 35, 3
 “ 2 沂南畫像石、曾等一九五六、圖版七六
 “ 3 傳渾源李峪村出土壺紋樣、上海博物館一九六四、附冊、六九頁
 “ 4 徐州利國畫像石、江蘇省文物管理委員會、南京博物院一九六四、圖五、2
 “ 5 沂南畫像石、曾等一九五六、圖版六二
 “ 6 玉飾、サックラー氏所藏、J—三三一
 圖七、 1 信陽長臺關一號墓出土瑟紋樣、林一九六一、圖一四
 “ 2 陳侯壺紋樣、Tchou 1924, pl. 15
 圖八、 1 圖一、11の鬼神の筆者の想像復原圖
 “ 2 城固五郎廟村出土戈紋樣、祝等一九六六、圖四下
 “ 3 江陵望山一號墓出土鎮墓獸、湖北省文化局文物工作隊一九六六、圖二〇
 “ 4 傳長沙出土鎮墓獸、Salmony 1964, pl. 4, 5
 “ 5 信陽長台關一號墓出土佩玉、河南省文化局文物工作隊第一隊一九五七、圖九
 “ 6 頌壺紋樣、容一九三四a、圖版八七
 圖九、 1 安陽侯家莊一〇〇一號墓出土骨柶紋樣、梁等一九六二、圖版二一〇、九
 “ 2 輝縣琉璃閣七五號墓出土鑑紋樣、郭一九五九、圖版一〇〇
 “ 3 青銅壺紋樣、梅原一九三六、圖一七、二
 “ 4 信陽長臺關一號墓出土鎮墓獸、講談社版世界美術大系、中國美術一、六頁（復原模型）
 “ 5 新鄭出土疆良像、孫一九三七、圖版一三三
 “ 6 信陽長臺關二號墓出土臺附鹿角、河南省文物工作隊一九五八、圖版六
 圖一〇、 1 青銅壺紋樣、梅原一九三六、圖版七一、一
 “ 2 輝縣琉璃閣七五號墓出土鑑、郭一九五九、圖版一〇〇
 “ 3 青銅壺紋樣、梅原一九六〇—二、圖版三八六
 “ 4 北京懷柔城出土陶壺紋樣、北京市文物工作隊一九六二、圖七、1
 圖一一、 1 青銅壺紋樣、容一九四一、上、圖二三八
 “ 2 圖一、1の神の筆者の想像復原圖
 “ 3 甲骨文字、中國科學院考古研究所一九六五、八〇九—一〇頁
 “ 4 同右
 “ 5 圖一一、3、4部分
 “ 6 甲骨文字、中國科學院考古研究所一九六五、三三—三三頁
 “ 7 圖一一、3、4部分
 “ 8 甲骨文字、中國科學院考古研究所一九六五、三九七—三八頁
 “ 9 圖一一、3、4部分
 圖一二、 1 信陽長臺關一號墓出土瑟紋樣、林一九六一、圖一四
 “ 2 同右
 “ 3 觚圖象記號、于一九五七、三四九
 “ 4 爵圖象記號、羅一九三六、一五、三三—三三葉
 “ 5 鼎圖象記號、于一九五七、二七
 “ 6 甗圖象記號、羅一九三六、一八、一九葉
 “ 7 方彝圖象記號、于一九五七、五〇四
 “ 8 益都蘇埠村出土車飾紋樣、山東省文物管理處、山東省博物館一九五九、圖八四
 “ 9 寧鄉出土方鼎紋樣、講談社版世界美術大系、中國美術一、四九頁圖版四五
 “ 10 洛陽小屯村一號墓出土玉像、考古研究所洛陽發掘隊一九五九、圖四、1
 “ 11 洛陽東郊西周墓出土玉像、講談社版世界美術大系、中國美術一、五四頁圖版六一
 “ 12 玉像、范一九五九、六五頁右上圖
 圖一三、 1 埤南朱碧區出土尊紋樣、葛一九五九、表紙（挿圖は筆者撮影

寫眞による)

2 甲骨文字、中國研科學院考古研究所一九六五、八一三頁

3 圖一三、2部分

4 同右

5 甲骨文字、中國科學院考古研究所一九六五、八一三頁

6 廣州市東郊出土陶俑、廣州市文物管理委員會一九五五、圖版

四

7 重慶市化龍橋附近出土陶俑、胡一九五八、圖版七、10

8 畫像印 陳一九二二、三〇、三八葉

9 義烏縣城附近出土黃釉陶甗、汪等一九六五、圖一、3

圖一四

屈家嶺文化遺蹟分布圖、宜都高一九六五、信陽は河南省文化局文物工作隊一九五九、一一頁により、他は中國科學院考古研

究所一九六二、二八—三〇頁による。

圖一五

華中地域殷、西周文化遺蹟分布圖

河南省

洛陽—文獻略

鄭州—文獻略

沁陽—西周後期青銅彝器、關一九六六

孟—西周前期住居址、墓、青銅彝器、河南省文化局文物工作

隊一九六一

偃師—殷前期宮殿遺蹟、中國科學院考古研究所洛陽發掘隊一九

六五

臨汝—殷前期遺蹟、倪一九六一

商邱—殷前期青銅彝器、天津市文化局文物組一九六四、三三頁

魯山—殷後期青銅彝器、裴一九五八

淮陽—殷後期青銅彝器、西周前期土器、劉一九六四

南陽—殷後期遺蹟、游一九五九

上蔡—殷後期青銅彝器、河南省文化局文物工作隊第一隊一九五

七a

長沙出土楚帛書の十二神の由來

信陽—殷、西周遺蹟、河南省文化局文物工作隊一九五九、一一

頁

湖北省

江陵—西周中期青銅彝器、王一九六三a、李一九六三

孝威—白川一九六二

黃坡、楊家灣—殷—殷中期青銅彝器、郭冰廉一九五八

黃坡、礦山水庫—殷中期青銅彝器、郭冰廉一九五八a

黃坡、盤龍城—殷中期青銅彝器、郭一九六四

浠水—西周前期青銅器、劉等一九六五

圻春—西周前期住居址、青銅彝器、中國科學院考古研究所湖北

發掘隊一九六二

紅安—西周前期住居址、湖北省文物管理處一九六〇

湖南省

石門—殷遺蹟、高一九六〇、五七頁

桃源—殷後期青銅彝器、同右

安化—殷後期青銅彝器、同右

桃江—西周前期(?)青銅彝器、同右

寧鄉、寨子山—殷後期及殷類似文化青銅彝器、高一九六〇、五

七頁、高一九六三、六四八頁、唐一九六五

寧鄉、黃材、炭河里—殷後期及殷類似文化青銅彝器、高一九六

三、六四八頁

寧鄉、黃材、月山鋪—殷後期及殷類似文化青銅彝器、同右

寧鄉、黃材、水塘灣—殷後期青銅彝器、同右、六四七頁

寧鄉、黃材、檀木橋—殷後期遺蹟、同右、六四八頁

寧鄉、老糧倉—殷類似文化銅器、湖南省博物館一九六六、一一

二頁

長沙—殷後期青銅彝器、高一九六〇、五八頁

湘潭—西周中期青銅彝器、湖南省博物館一九六六、三頁

株洲—西周中期(?)青銅彝器、同右、四頁

五七

霞流—西周類似文化青銅彝器、唐一九六六
臨武—西周青銅彝器、湖南省博物館一九六六、四頁
山東省

滕—殷後期青銅彝器、孔一九五九

蒼山—殷後期青銅彝器、臨沂文物收集組一九六五

安徽省

亳—殷遺蹟、華東文物工作隊一九五四、四頁

太和—殷後期遺蹟、同右、尹一九五四、二七頁、殷一九五四、三二頁

泗

泗—殷遺蹟、無名氏一九五五

泗洪—西周遺蹟、尹等一九六四、二三—三頁

盱眙—西周遺蹟、尹等一九六四、二三—三頁

埭南—殷中期青銅彝器、葛一九五九

嘉山—殷中期青銅彝器、葛一九六五

壽—殷後期遺蹟、王一九四七、二四八、二五〇頁

屯溪—西周前期、中期及西周類似文化青銅彝器、安徽省文化局

文物工作隊一九五九、胡一九六五

潛山—殷類似文化青銅彝器、陳一九五六 a、一二五頁

江蘇省

徐州—殷中期、後期遺蹟、江蘇省文物管理委員會一九五八、南

京博物院一九六〇、南京博物院等一九六〇

邳—西周遺蹟、南京博物院一九六四、四二二頁

新沂—西周遺蹟、南京博物院一九六〇 a、南京博物院一九六四、二一—二頁

贛榆—西周遺蹟、南京博物院一九六四、二一—二頁

連雲港—殷中期青銅彝器、江蘇省文物工作隊一九六一、三三三頁

睢寧—殷遺蹟、尹等一九六三、六頁

宿遷—西周遺蹟、同右

圖一六

殷類似文化鉦ほか

1. 2 寧鄉出土鉦、高一九六〇、圖2、3
- 3 寧鄉老糧山出土鉦、湖南省博物館一九六六、圖三
- 4 潛山出土鉦、陳一九五六 a、圖版一一、1
- 5 新余出土鉦、薛一九六三、圖二
6. 7 長興出土鉦、簋、浙江省文物管理委員會一九六〇、四九頁
- 8 餘杭出土鉦、王一九六五、圖版一〇、10

泗洪—西周遺蹟、同右
沭陽—西周遺蹟、同右
泗陽—西周遺蹟、同右
泗縣—無名氏一九五五
儀徵—西周類似文化青銅彝器、王等一九五六
丹徒—西周前期及西周類似文化青銅彝器、江蘇省文物管理委員會一九五五、江蘇省文物管理委員會一九五六
南京—西周前期及後期青銅彝器、李一九六〇

浙江省

長興—殷類似文化青銅彝器、浙江省文物管理委員會一九六〇

餘杭—殷類似文化青銅彝器、王一九六五

江西省

萬年—殷後期青銅彝器、郭一九六五

東鄉—殷中期青銅彝器、薛一九六三、四一六頁

新余—殷類似文化青銅彝器、同右

萍鄉—西周中期青銅彝器、同右、四一六—七頁

なおこれ以外、柯一九三三からは、同書五、七から湖北省宜都、六・五から湖南省岳陽、一〇、二〇から河南省魯山等の關係青銅器出土地の傳承を拾うことができるが、出土の情報信頼度が劣り、またこれらを加えても全般の形勢には影響がないため、採っていない。

引用文獻目錄

日本文・中國文(著者名五〇音順)

安徽省文化局文物工作隊 一六五九、安徽屯溪西周墓葬發掘報告、考古學報、一九五九、四、五九一八八

安志敏、陳公柔 一九六三、長沙戰國繪畫及其有關問題、文物、一九六三、九、四八—六〇

尹煥章 一九五四、從發現的文物中談華東區古文化概況、文物參考資料、一九五四、四、二六—三〇

尹煥章等 一九六三、淮陰地區考古調查、考古、一九六三、一、一一—一八

〃 一九六四、洪澤湖周圍的考古調查、考古、一九六四、五、二二—〇一六

殷 濂非 一九五四、安徽地區四年來發現的攷古材料、文物參考資料、一九五四、四、三一—四

殷濂非等 一九五八、壽縣出土的“鄂君啓金節”文物參考資料、一九五八、四、八一—一

于省吾 一九五七、商周金文錄遺、北京

梅原末治 一九三三、歐米菟儲支那古銅精華、彝器部、京都

〃 一九三六、戰國式銅器的研究、京都

〃 一九五五、古玉圖錄、京都

〃 一九六〇—二、日本蒐儲支那古銅精華、彝器編—京都

王 鍾彤 一九六三、荊門出土的一件銅戈、文物、一九六三、一、六四—五

〃 一九六三a、江陵發現西周銅器、文物、一九六三、二、五三—五

汪濟英、牟永抗 一九六五、浙江義烏發現西漢墓、考古、一九六五、三、一五二—四

王 士倫 一九六五、記浙江發現的銅鏡、釉陶鐘和越王石矛、考古、一九六五、五、二五六—七

長沙出土楚帛書の十二神の由來

王志敏等 一九五六、介紹江蘇儀徵過去發現的幾件西周青銅器、文物參考資料、一九五六、一二、三一—二

王 湘 一九四七、安徽壽縣史前遺址調查報告、中國考古學報、二、一七九—二五〇

河南省文化局文物工作隊 一九五九、河南信陽三里店遺址發掘報告、考古學報、一九五九、一、一一—一

〃 一九六一、河南孟縣澗溪遺址發掘、考古、一九六一、一、三三—九

河南省文化局文物工作隊第一隊 一九五六、鄭州碧沙崗發掘簡報、文物參考資料一九五六、三、二七—三九

〃 一九五七、我國考古史上的空前發現、信陽長臺關發掘一座戰國大墓、文物參考資料、一九五七、九、二—一二

河南省文化局文物工作隊第一隊 一九五七a、河南上蔡出土的一批銅器、文物參考資料、一九五七、一一、六六—九

河南省文物工作隊 一九五八、信陽長臺關第二號墓的發掘、考古通訊、一九五八、一一、七九—八〇

柯 昌濟 一九三三、金文分域編、餘國叢刊

華東文物工作隊 一九五四、四年來華東區的文物工作及其重要的發現、文物參考資料、一九五四、八、三一—三四

郭 遠謂 一九六五、江西近兩年出土的青銅器、考古、一九六五、七、三七—三

郭 德維 一九六四、湖北黃坡盤龍城商代遺址和墓葬、考古、一九六四、八、四二〇—一

郭 冰廉 一九五八、湖北黃坡楊家灣的古遺址調查、考古通訊、一九五八、一、五六—八

〃 一九五八a、湖北黃坡礦山水庫工地發現了青銅器、考古通訊、一九五八、九、七二—三

郭 寶鈞 一九五一、一九五〇年春殷墟發掘報告、中國考古學報、五、一

一六一

〃 一九五九、山彪鎮與琉璃閣、北京

郭沫若 一九三三、卜辭通纂、東京

〃 一九三七、殷契粹編、東京

〃 一九五八、關於鄂君啓節的研究、文物參考資料、一九五八、四、三一六

葛介屏 一九五九、安徽埭南發現殷商時代的青銅器、文物、一九五九、一、表紙裏及表紙

葛治功 一九六五、安徽泊崗引河出土的四件商代銅器、文物、一九六五、七、二三—五

關玉翠等 一九六六、沁陽縣出土的兩件西周銅壺、文物、一九六六、一、五六—七

饒宗頤 一九五八a、長沙楚墓帛畫山鬼圖跋、金檀論古綜合刊、一、六〇

倪自勵 一九六一、臨汝夏店發現商代文化遺址、文物、一九六一、一、七五

胡厚宣 一九三四、楚民族源於東方考、史學論叢、一

〃 一九四四、甲骨學商史論叢、初集、成都

胡人朝 一九五八、重慶市化龍橋東漢磚墓的清理、考古通訊、一九五八、三、四二—三

胡文 一九六五、安徽屯溪奕棋又出土大批西周珍貴文物、文物、一九六五、六、五二

湖南省博物館 一九六六、湖南省博物館新發現的幾件銅器、文物、一九六六、四、一一六

湖北省文物管理處 一九六〇、湖北紅安金盆遺址的探掘、考古、一九六〇、四、三八—四〇

湖北省文化局文物工作隊 一九六六、湖北江陵三座楚墓出土大批重要文物、文物、一九六六、五、三三一—五

孔繁銀 一九五九、山東滕縣井亭煤礦等地發現商代銅器及古遺址、墓葬、

文物、一九五九、一二、六七—八

江蘇省文物管理委員會 一九五五、江蘇丹徒煙墩山出土的古代青銅器、文物參考資料、一九五五、五八—六

〃 一九五六、江蘇丹徒煙墩山西周墓及附葬坑出土的小器物補充材料、文物參考資料、一九五六、一、四五—六

〃 一九五八、徐州高皇廟遺址清理報告、考古學報、一九五八、四、七一—八

江蘇省文物工作隊 一九六一、江蘇新海連市大村新石器時代遺址調查記、考古、一九六一、六、三二—三

江蘇省文物管理委員會、南京博物院 一九六四、江蘇徐州、銅山五座漢墓清理簡報、考古、一九六四、一〇、五〇四—一九

考古研究所洛陽發掘隊 一九五九、洛陽西郊一號戰國墓發掘記、考古、一九五九、一二、六五三—五七

高至喜 一九六〇、商代人面方鼎、文物、一九六〇、一〇、五七一—八

〃 一九六三、寧鄉黃材發現商代銅器和遺址、考古、一九六三、一二、六四六—八

高仲達 一九六五、湖北宜都甘家河新石器時代遺址、考古、一九六五、一、四一—二

廣州市文物管理委員會 一九五五、廣州市東郊東漢磚墓清理紀略、文物參考資料、一九五五、六、六一—七六

講談社版世界美術大系、中國美術 一、一九六三、東京

山東省文物管理處、山東省博物館 一九五九、山東文物選集、普查部分、北京

上海博物館 一九六四、上海博物館藏青銅器、上海

祝培章 一九六一、陝西城固發現的青銅器、文物、一九六六、一、一一二

徐中舒 一九三五、古代狩獵圖像考、慶祝蔡元培六十五歲論文集、下、北京、五六九—六一八

〃 一九三六、殷周之際史蹟之檢討、歷史語言研究所集刊、第七本、

第二分、一三七—一六四頁

- 蔣 元佑 一九四九、長沙、一、上海
白川 靜 一九五六、載書關係字說、甲骨文文學論叢、四、四〇—九五
〃 一九六二、安州六器通釋、甲骨文文學論叢、一〇、一一—一六〇
〃 一九六六、金文通釋、一四、白鶴美術館誌、一四輯
〃 一九六七、金文通釋、一八、白鶴美術館誌、一八輯
齊 泰定 一九五五、河南洛陽發現殉鹿的墓葬一座、文物參考資料、一九五五、九、一五九
浙江省文物管理委員會 一九六〇、浙江長興縣出土的兩件銅器、文物、一九六〇、七、四八—九
薛 堯 一九六三、江西近年出土的幾件青銅器、考古、一九六三、八、四一六—八
曾昭燏等 一九五六、沂南古畫像石墓發掘報告、北京
〃 一九五九、試論湖熟文化、考古學報、一九五九、四、四七一—五八
孫 海波 一九三七、新鄭彝器、北京
〃 一九三七a、河南通志文物志甲骨文錄
譚 其驥 一九六二、鄂君啓金節銘文釋地、中華文史論叢、二、上海、一六九—一九〇
中國科學院考古研究所 一九五六、輝縣發掘報告、北京
〃 一九六二、新中國的考古收穫、北京
〃 一九六五、甲骨文編、北京
中國科學院考古研究所湖北發掘隊 一九六二、湖北圻春毛家咀西周木構建築、考古、一九六二、一、一一—九
中國科學院考古研究所洛陽發掘隊 一九六五、河南偃師二里頭遺址發掘簡報、考古、一九六五、五、二一五—二四
張 永年 一九六二、關於“湖熟文化”的若干問題、考古、一九六二、一、三二—六
張 壽林 一九三〇、商頌考、審湖期刊、二、一一—二九

長沙出土楚帛書的十二神的由來

- 陳 介祺 一九三二、十鐘山房印學、上海
陳 夢家 一九三六、古文字中之商周祭祀、燕京學報、一九、九—一五五
〃 一九三六a、商代的神話與巫術、燕京學報、二〇、四八—五七
〃 一九五六、殷虛卜辭綜述、北京
〃 一九五六、西周銅器斷代論、考古學報、一九五六、三、一〇五—一二七
天津市文化局文物組 一九六四、天津市收集的商周青銅器、文物、一九六四、九、三三—三六
董 作賓 一九四五、殷曆譜、南溪
唐 蘭 一九六五、殷大禾方鼎（人面鼎）、人民中國、一九六五、一〇、一二〇
〃 一九六六、西周虬蜴紋尊、人民中國、一九六六、三、一二〇
南京博物院 一九六〇、一九五九年冬徐州地區考古調查、考古、一九六〇、三、二五—九
〃 一九六〇a、江蘇新沂三里墩古文化遺址第二次發掘簡介、考古、一九六〇、七、二〇—二
〃 一九六四、江蘇邳海地區考古調查、考古、一九六四、一、一九—二五
南京博物院等 一九六〇、江蘇省十年來考古工作中的重要發現、文物、一九六〇、七、一一—一
馬 全 一九五五、河南濶陽清理了由西周至宋等代的許多墓葬、文物參考資料、一九五五、五、一一—七
裴 琪 一九五八、魯山縣發現一批重要銅器、文物、一九五八、五、七三—四
林已奈夫 一九五三、殷周青銅器に現れる龍について、東方學報、京都二三、一八—二一八
〃 一九五八、安陽殷虛の哺乳動物群について、甲骨學、六、一六

- 林巳奈夫 一五四
 一九六一、戰國時代の畫像紋(-)、考古學雜誌、四七、三、二七
 一四九
 一九六三、漢代男子のかぶりもの、史林、四六、五、八〇—一
 二六
 一九六四、長沙出土戰國帛書考、東方學報、京都三六、五三一
 九七
 一九六五、中國古代の文化、世界の文化、中國、一九六五、東
 京、七六一—〇九
 一九六六、長沙出土戰國帛書考補正、東方學報、京都三七、五
 〇九—一四
 一九六〇、殷周時代の遺物に表はされた鬼神、考古學雜誌、四
 六、二、一〇五—一二
 一九六六 a、鳳凰の圖像の系譜、考古學雜誌、五一、一、一一
 一—八
 一九六七、中國古代の神巫、東方學報、京都三八、一九九—二
 二四
 一九六八、殷周時代の圖像記號、東方學報、京都三九、一一—
 一七
 范 汝森 一九五九、商周時代の幾件玉雕、文物、一九五九、七、六五頁
 北京市文物工作隊 一九六二、北京懷柔城北東周兩漢墓葬、考古、一九六
 二、五、二一九—三九
 星川清孝 一九六一、楚辭の研究、天理
 水野清一 一九四八、畫像印について、東方學報、京都一六、一三五—四
 〇
 無名氏 一九五五、安徽泗縣、亳縣發現骨器、石器及漢墓、文物參考資
 料、一九五五、六、一二—二二
 俞 偉超 一九六三、"大武闔兵"、銅戚與巴人、"大武"、舞、考古、一九六
 三、三、一五三—五
- 游 清漢 一九五九、河南南陽市十里廟發現商代遺址、考古、一九五九、
 七、三七〇
 容 庚 一九三四 a、武英殿彝器圖錄、北京
 一九三六、善齋彝器圖錄、北京
 一九四一、商周彝器通考、北京
 楊 寬 一九四一、中國上古史導論、古史辨、七、上、六五—四〇四
 羅 振玉 一九二一、殷虛書契前編
 一九一六、殷虛書契後編
 一九三三、殷虛書契續編
 一九三六、三代吉金文存
 李 亞農 一九五〇、殷契摭佚續編、北京
 一九五六、西周與東周、上海
 李 蔚然 一九六〇、南京發現周代銅器、考古、一九六〇、六、四一
 李 健 一九六三、湖北江陵萬城出土西周銅器、考古、一九六三、四、
 二四—五
 劉 體智 一九三五、小校經閣金文拓本
 劉長孫等 一九六五、湖北滄水發現兩件銅器、考古、一九六五、七、三六
 九—七〇
 劉 東亞 一九六四、河南淮陽出土的青銅器和陶器、考古、一九六四、三、
 一六三—四
 梁思永、高去尋 一九六二、侯家莊、二、一〇〇—一號大墓、臺北
 臨沂文物收集組 一九六五、山東蒼山縣出土青銅器、文物、一九六五、七、
 二七—三〇
 歐 文
 Barnard, N., 1971: The Ch'u Silk Manuscript and Other Archaeological
 Documents of Ancient China, *Early Chinese Art and its
 Possible Influence in the Pacific Basin*, New York.
 Barnard, N., 1971 a: *The Ch'u Silk Manuscript*, New York
 Palmgren, N., 1954: *Selected Chinese Antiquities from the Collection*

of Gustaf Adolf, Stockholm

Miyakawa, H. und Kollatz, A., 1966: Zur Ur- und Vorgeschichte
des Schamanismus, *Zeitschrift für Ethnologie*, B. 92, H. 2,
161-93

Salmony, A., 1964: *Antler and Tongue, An Essay on Ancient Chinese*

Symbolism, Artibus Asiae, Supplement XIII, Ascona
Tchou, Tö-yi, 1924, *Bronze Antique de la Chine Appartenant à C.*
T. Loo, Paris et Bruxelles

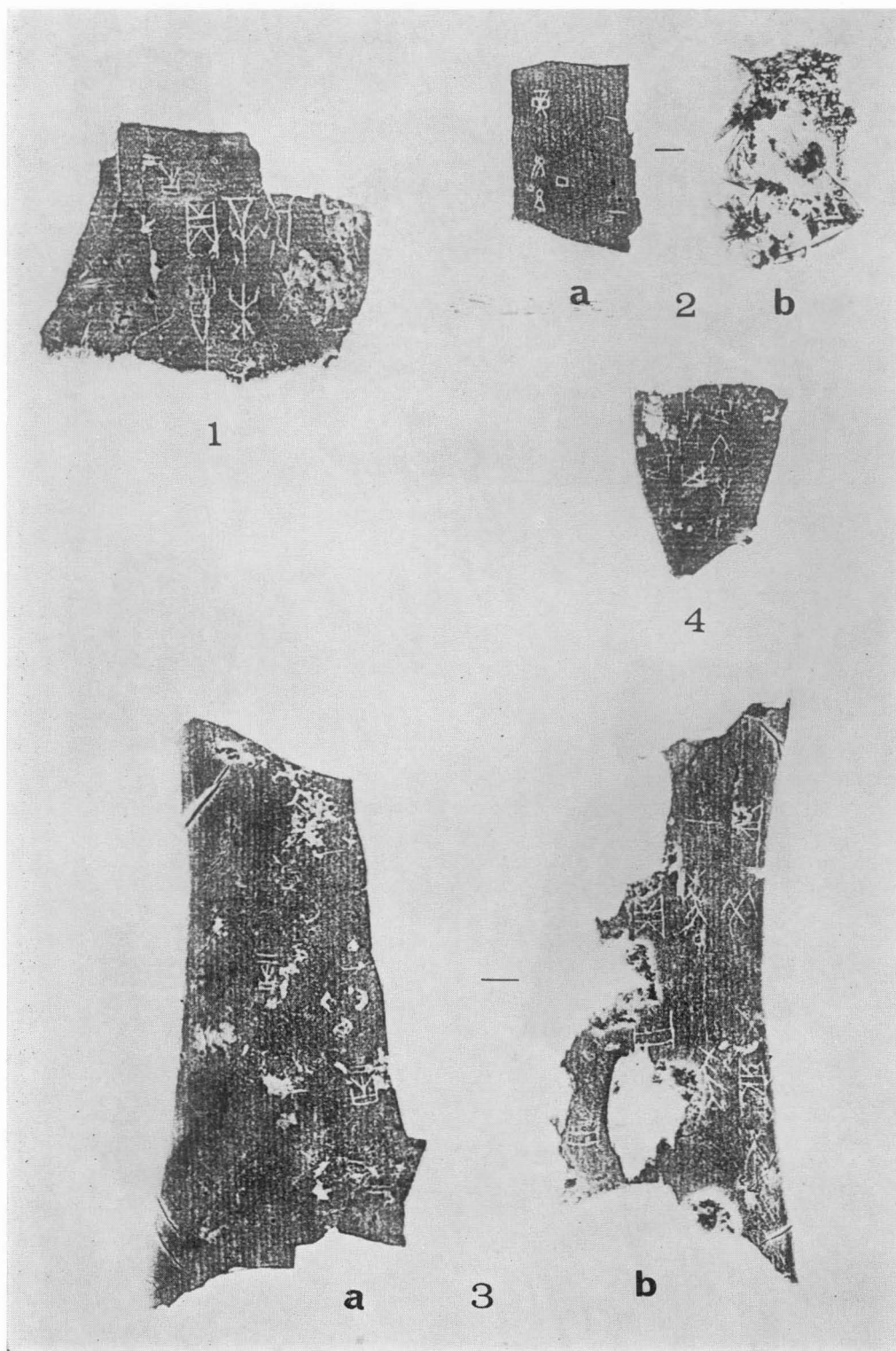


Plate I

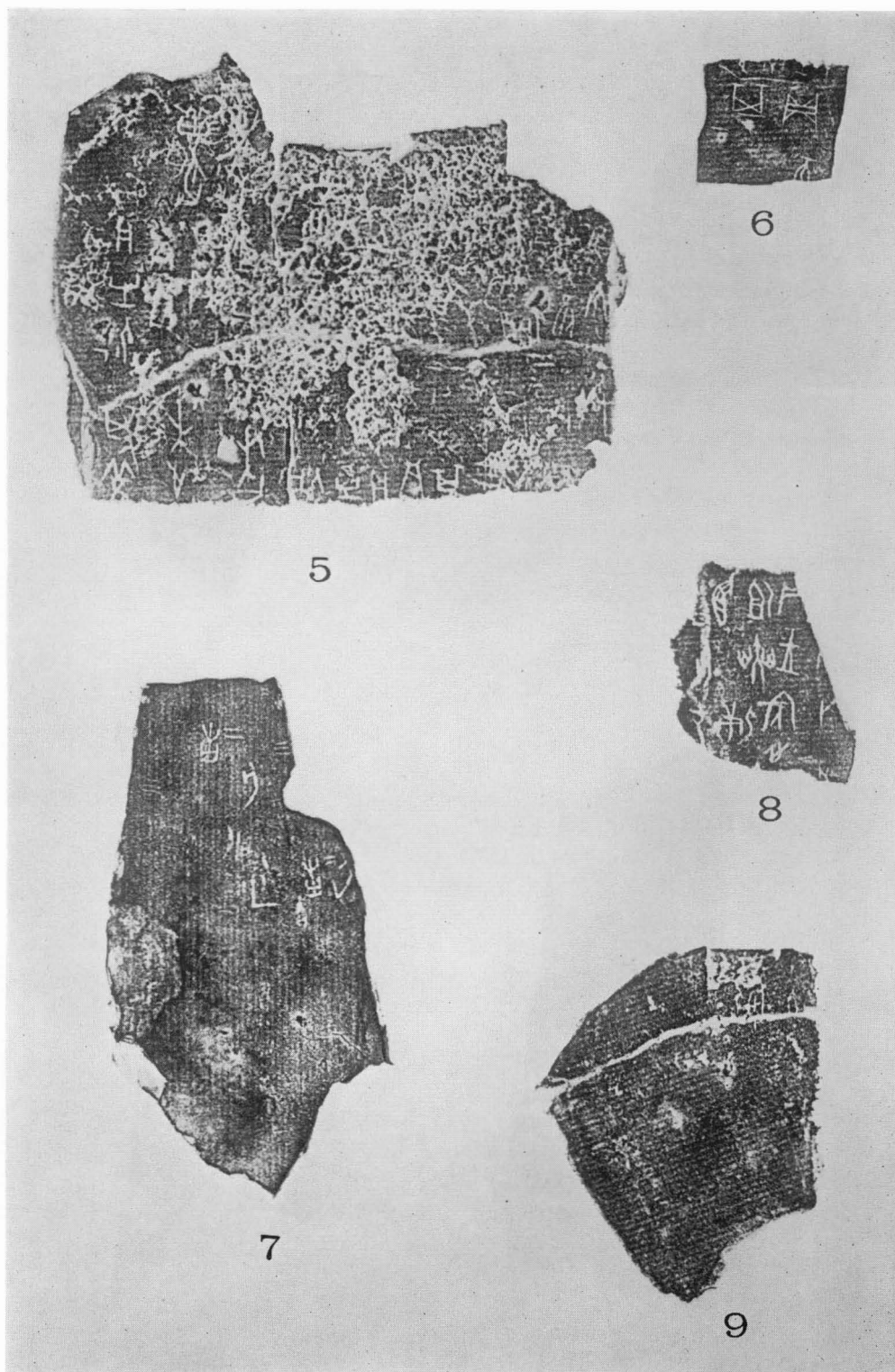
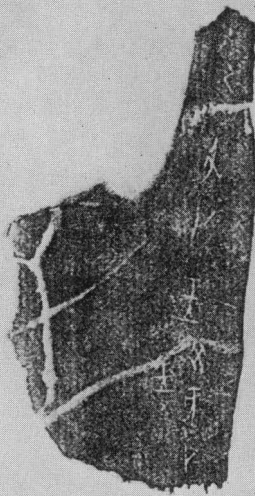


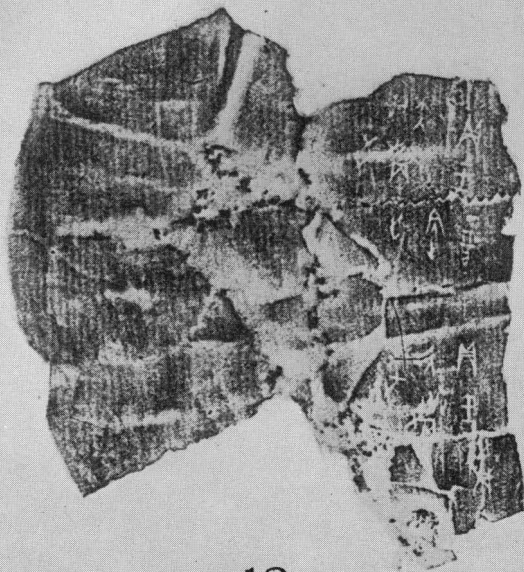
Plate II



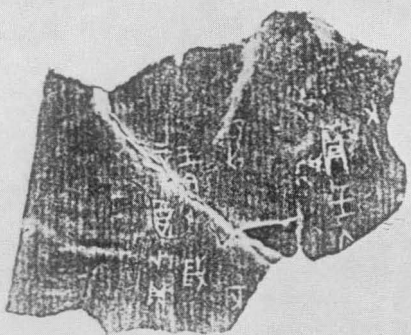
10



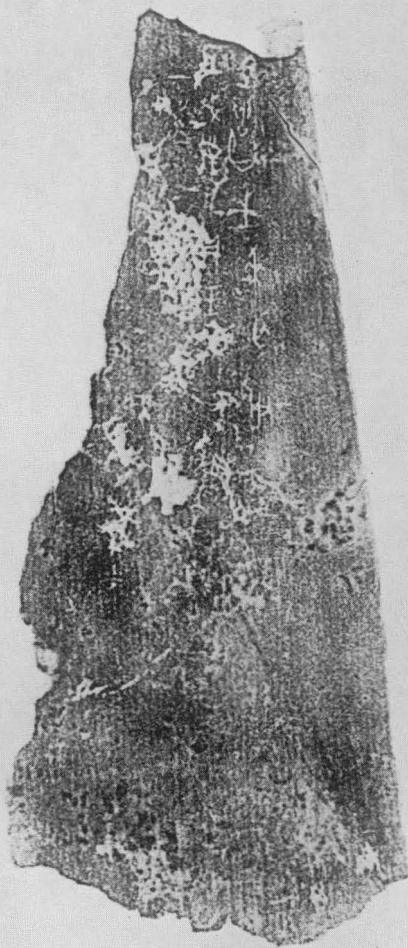
11



12



13



14



15



16

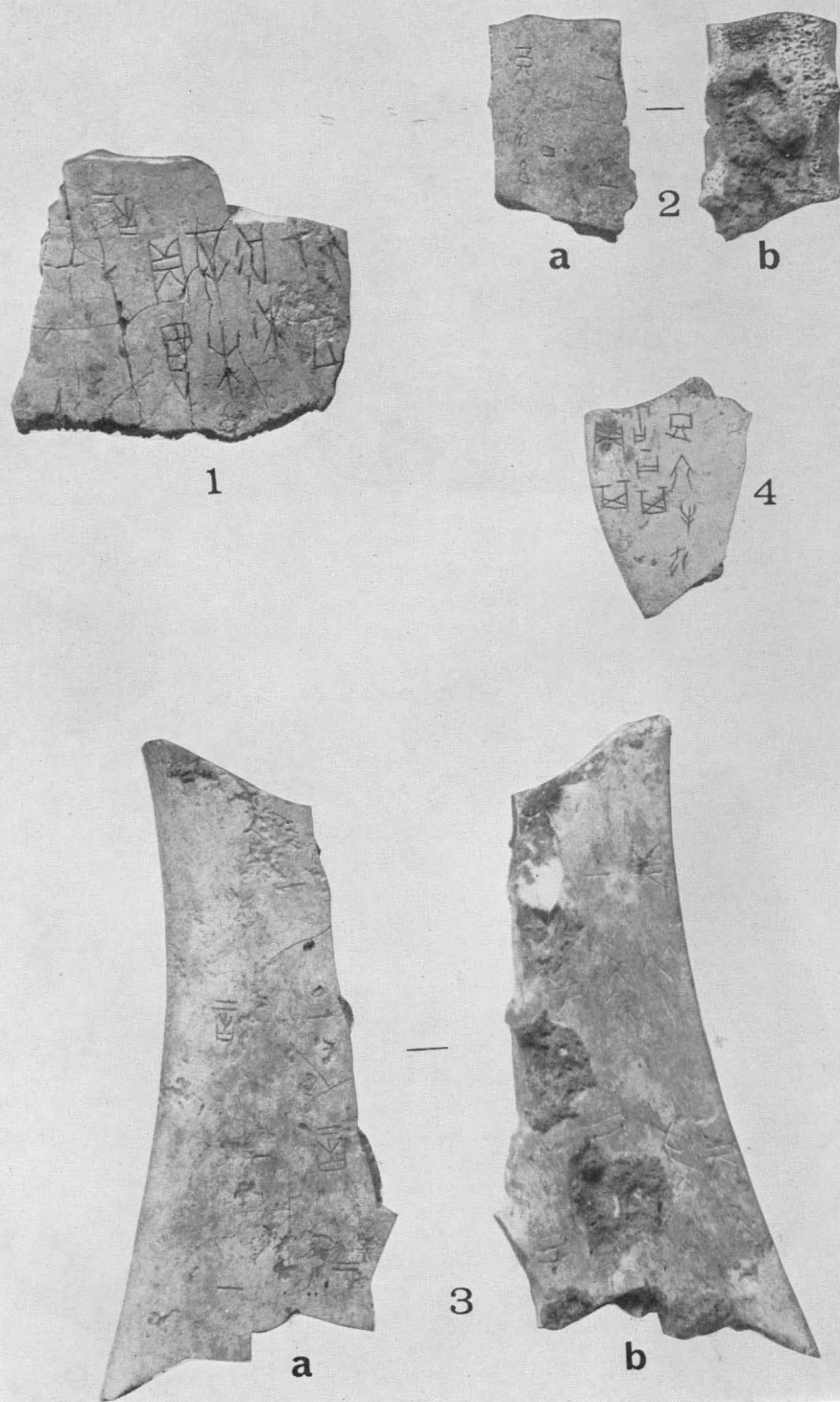
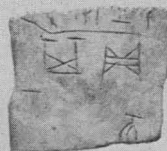


Plate V



5



6



8



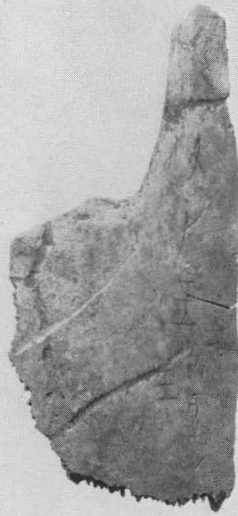
7



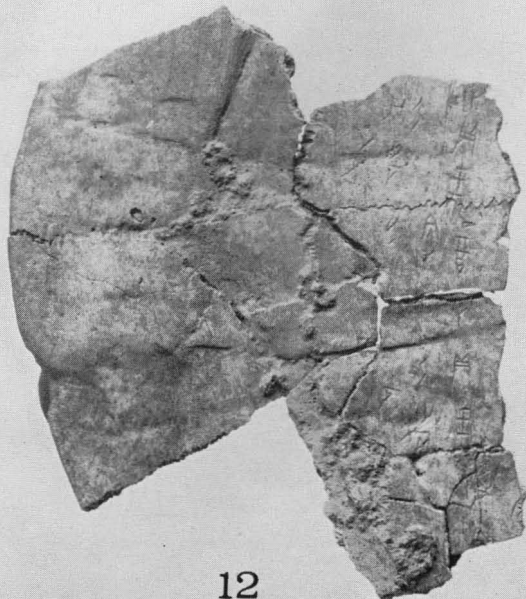
9



10



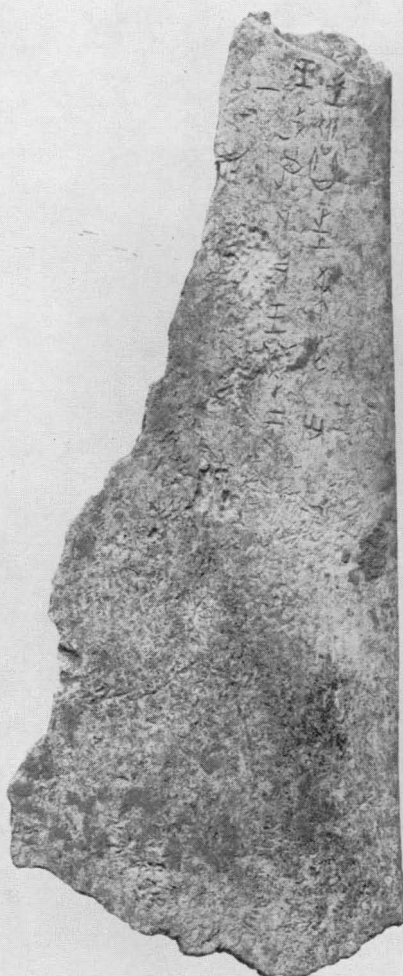
11



12



13



14



15



16